『維摩経玄疏』訳注（10）

菅　野　博　史

本訳注は、「『維摩経玄疏』訳注（一）」（『大倉山論集』40、1996.12、235-261）、「『維摩経玄疏』訳注（二）」（『大倉山論集』45、1999.3、297-316）、「『維摩経玄疏』訳注（三）」（『多田孝文名誉教授古稀記念論文集　東洋の慈悲と智慧』所収、33-54、山喜房仏書林、2013.3）、「『維摩経玄疏』訳注⑷」（『創価大学人文論集』29、2017.3、33-72）、「『維摩経玄疏』訳注⑸」（『創価大学人文論集』30、2018.3、61-84）、「『維摩経玄疏』訳注⑹」（『創価大学人文論集』31、2019.3、115-148）、「『維摩経玄疏』訳注⑺」（『創価大学人文論集』32、2020.3、49-73）、「『維摩経玄疏』訳注⑻」（『創価大学人文論集』33、2021.3、55-87）、「『維摩経玄疏』訳注⑼」（『創価大学人文論集』34、2022.3、51-83）の続編である。今回で、『維摩経玄疏』全六巻の訳注を終える。創価大学大学院の授業において、院生と『維摩経玄疏』を一緒に読んできた。参加者は、田原洋治、高原維斗士、松村光城、高田伸二の四氏である。

参考までに、今回の範囲である『維摩経玄疏』巻第六の科文を下に示す。科文については、これまで長期にわたる連載において、修正すべき箇所も見られるので、訳注がすべて終わって、全体をまとめる際に、改めて科文表を作成することとする。現在の科文においては、「目」の下の層については、算用数字を用いる。科文の名称については、テキストの箇所によって若干の表現の相違が見られるので、適宜処理する。科文の名称の後の（　）に、大正蔵巻第38の頁・段・行を挿入する。

翻訳部分に、大正蔵巻第38の頁・段を挿入する。

注のなかの引用典拠については、CBETA を利用する。ただし、漢字は常用字体を用い、句読点は改める。『大日本続蔵経』については、『新纂大日本続蔵経』を使用し、略号を X とする。

『維摩経玄疏』科文

『維摩経玄疏』巻第六

第二章　此の経の正意を辨ず (554b26)
第一節　正しく体を辨ず (554c3)
第一項　正しく不思議真性を此の経の体と為すを明かす (554c5)
第二項　須らく経の体を知るべきを明かす (554c27)
第二節　偽を簡び真を顕わす (555a22)
第一項　正しく偽を簡び真を顕わすを明かす (555a24)
第一目　実相に非ざるを簡ぶ (555a28)
1.　世俗の経書の明かす所は実相に非ず (555b1)
2.　外人の経書の明かす所は実相に非ず (555b7)
3.　声聞経に明かす所は実相に非ず (555b14)
第二目　正しき実相を顕わす (555b17)
第二項　共・不共の教に約して同異を簡別す (555b23)
第一目　共の二乗に約して般若を説く (555b26)
1.　通教に約す (555b28)
2.　別教に約す (555c7)
3.　円教に約す (555c23)
第二目　不共の二乗に約して般若を説く (556a9)
1.　別教に約す (556a11)
2.　円教に約す (556a17)
第三項　三諦に約して去取を明かす (556a20)
第一目　三諦に約す (556a22)

1.　略して三諦を明かす (556a24)

2.　去取を明かす (556a26)

第二目　二諦に約す (556a29)

1.　略して二諦の相を明かす (556b2)

1.1.　理外の二諦を明かす (556b3)

1.1.1.　随情の二諦を明かす (556b6)

1.1.2.　随情智の二諦を明かす (556b20)

1.1.3.　随智の二諦を明かす (556b27)

1.2.　理内の二諦を明かす (556c17)

1.2.1.　中道もて真を合して二諦を明かす (556c21)

1.2.2.　真諦もて俗を合して二諦を明かす (556c28)

1.2.3.　不思議の二諦を明かす (557a3)

2.　去取を明かす (557a6)

第三目　一諦に約す (557a14)

第三節　四門より体に入るを明かす (557a17)

第一項　略して四門の相を辨ず (557a25)

第一目　三蔵教の四門を明かす (557b7)

1.　有門 (557b9)

2.　空門 (557b15)

3.　有空門 (557b20)

4.　非有非無門 (557b24)

第二目　通教の四門を明かす (557c3)

第三目　別教の四門を明かす (557c11)

第四目　円教の四門を明かす (558a2)

第二項　正しく四門より体に入るを明かす (558a16)

第一目　三蔵・通教の両種の四門より同じく偏真の理に入る (558a22)

第二目　別・円の両教の四門より同じく円真の理に入る (558b2)

第三項　悉檀もて四門の教を起こすを明かす (558b10)

第一目　四悉檀を用て三蔵教の四門を起こす (558b16)

1.　四悉檀を用て三蔵教の有門を起こす (558b18)

2.　四悉檀を用て三蔵教の空門を起こす (558b27)

3.　四悉檀を用て三蔵教の有無門を起こす (558c11)

4.　四悉檀を用て三蔵教の非有非無門を起こす (558c13)

第二目　四悉檀を用て通教の四門を起こす (558c15)

第三目　四悉檀を用て別教の四門を起こす (558c16)

第四目　四悉檀を用て円教の四門を起こす (558c17)

第四節　一法異門 (558c18)

第五節　衆経の体と為す (559a8)

第六節　観心に約す (559a13)

第七節　此の『経』を通釈す (559a21)

第三章　仏国の因果を宗と為すを明かす (559a23)

第一節　宗・体の不同を分別す (559b1)

第一項　先に宗・体の不異を覈す (559b2)

第二項　正しく宗・体の不同を明かす (559b10)

第二節　正しく因果もて宗の義を辨ずるを明かす (559b18)

第一項　正しく因果を宗と為すを明かす (559b21)

第二項　料簡 (559c2)

第三節　因果もて仏国の義を成ずるを明かす (559c23)

第一項　略して因果の相を辨ず (559c24)

第二項　通別を簡ぶ (560a3)

第一目　別して不思議の因果を簡ぶ (560a5)

第二目　通じて因果を簡ぶ (560a17)

第三項　正しく仏国を成ず (560a23)

第四項　観心に約す (560b15)

第五項　此の『経』の文を通ず (560b21)

第四章　権実の善巧を用と為す (560b28)

第一節　権実の用を簡ぶ（560c5）
第二節　諸教の権実の不同を明かす（560c14）
第三節　権実の義を釈す（560c23）
第四節　折伏・摂受を明かす（561a7）
第一項　略して折伏・摂受を明かす（561a9）
第二項　正しく此の『経』の文を通ず（561b1）
第五節　観心に約す（561b12）
第五章　教相（561b18）
第一節　教相の大意を明かす（561b27）
第二節　略して諸師の判教の不同を明かす（561c5）
第三節　研詳去取（561c17）
第四節　正しく経の教相を判ずるを明かす（561c27）

【翻訳】

維摩経玄疏巻第六

天台山修禅寺沙門智顗撰

第二章　此の『経』の正意を辨ず

前に此の経の玄義、大段は開いて五重と為すを明かす。第一の大段、釈名は略ぼ竟わる。今、次に第二の大段は、此の経の正意を辨ず。国に必ず王有るが如く、教に必ず主有るなり。此れに就いて略して七意を用て解釈す。

第一に正しく体を辨ず。第二に偽を簡んで真を顕わす。第三に実相に入る門。第四に一法異門。554c第五に衆経の体と為す。第六に観心に約す。第七に此の経を通釈す。

第一節　正しく体を辨ず

第一に正しく経体を辨ずとは、この経は不思議真性解脱を以て体と為すなり。真性解脱の義は、前に広く辨ずるが如し。

此れに就いて略して二意と為す。一には正しく此の経の体を辨ず。二に須らく経の体を知るべきを明かす。

第一項　正しく不思議真性を此の経の体と為すを明かす

一に正しく不思議真性を此の経の体と為すを明かすとは、若し他は此の経は多く権実を用て体と為すと明かさば、体は即ち是れ宗なり。今、但だ不思議真性解脱を以て体と為すとは、天に二の日無く、国に両主無きが如し。若し権実を体と為さば、権実は既に是れ二法なれば、是れ則ち一教に、便ち両体有り。今、但だ不思議真性解脱を用て体と為すとは、真性は即ち是れ一実の理なり。若し一実の理を用て体と為さば、即ち両体の過無きなり。言う所の真性解脱とは、此の『経』に云わく、「淫・怒・癡の性は、即ち是れ解脱なり」[1]と。今、淫・怒・癡の性は、即ち是れ真性なりと言う。真性は即ち是れ実相にして、一実諦の異名なり。『大涅槃経』に、「一実諦は即ち是れ真法なり。若し法は真に非ずば、実諦と名づけず」と明かす[2]。

問うて曰う。上に真諦は即ち是れ思議解脱の理なりと説けり。今、何が故に真実の性は即ち是れ不思議解脱の理なりと説くや。

答えて曰う。上は是れ偏真の真なり。今、『大涅槃経』に依りて、以て実諦を明かす。実諦とは、即ち是れ不思議の円真なり。円真の法性は、即ち是れ真性解脱なり。真性解脱には、即ち八倒無し。八倒無しとは、即ち是れ真性解脱なり。真性解脱には、虚妄有ること無し。虚妄無しとは、即ち是れ真性解脱なり。真性解脱は、即ち是れ大乗なり。大乗は、即ち是れ真性解脱なり。真性解脱は、即ち八魔[3]に非ず。八魔に非ざるは、即ち是れ真性解脱なり。真性解脱

1　此の『経』に云わく、「淫怒癡の性は、即ち是れ解脱なり」『維摩経』巻下、観衆生品、「仏為増上慢人説離婬怒癡為解脱耳。若無増上慢者、仏説婬怒癡性即是解脱」(T14, 548a16-18) を参照。

2　『大涅槃経』に、「一実諦は即ち是れ真法なり。若し法は真に非ずば、実諦と名づけず」と明かす　『南本涅槃経』巻第十三、聖行品、「仏言、善男子、言実諦者、名曰真法。善男子、若法非真、不名実諦」(T12, 685a24-25) を参照。

3　八魔　『南本涅槃経』巻第二十、光明遍照高貴徳王菩薩品、「八魔者、所謂四魔・無常・

は、即ち是れ一道清浄なり。一道清浄は、即ち是れ真性解脱なり。真性解脱は、即ち是れ常楽我浄なり。常楽我浄は、即ち是れ不可思議真性解脱なり。不可思議真性解脱は、即ち是れ此の『経』の正体なり。此くの如き真性は、豈に偏真に同じからんや。

第二項　須らく経の体を知るべきを明かす

二に須らく経の体を知るべきを明かすとは、若し経を尋ねて旨を失わば、事は調達[4]に同じ。六万の法蔵を読むと雖も、現身に大地獄に堕するを免れず。槃特[5]は但だ一偈(555a)を誦するのみにして、羅漢道を成ず。『大智論』に、声聞経に三法印、無常・無我・寂滅涅槃の印有りと説くが如し。小乗経に此の印有るは、即ち是れ小乗の了義経なり。行人は教えを稟(うけ)て、能く道を得るなり。若し三法印無くば、即ち是れ不了義経なり。聞く者は、未だ必ずしも生死を出離せず。一切の大乗経には、但だ一法印のみ有り。謂う所は、諸法実相なり。

若し大乗経に実相印有らば、即ち是れ大乗の了義経なり。聞く者は、乃ち菩薩道を得可し。若し諸法実相印無くば、即ち是れ不了義経なり。聞く者は、多く二辺に堕し、無生忍を得ること能わざるなり。

復た次に、若し実相印無くば、種種の願行を説くと雖も、猶お魔の説く所に濫(らん)ず。所以は何ん。魔王も亦た能く種種の願行を説くも、但だ諸法実相を説くこと能わず。故に『大智論』に云わく、「諸法実相を除いて、其の余の一切は、皆な是れ魔事なり」[6]と。諸法実相は、即ち是れ真性解脱の異名なり。

問うて曰う。声聞経は何が故に但だ三法印を用うるや。摩訶衍の教は何が

無楽・無我・無浄」（同前, 740b29）を参照。「四魔」は、煩悩魔・陰魔・死魔・天子魔を指す。

4　調達　Devadattaの訳語。提婆達多と音訳する。三逆罪（阿羅漢を殺し、仏の身より血を出し、和合僧を破す）を犯したために、生きながら地獄に堕ちたとされる。

5　槃特　周利槃特（Cūḍapanthakaの音訳）のこと。小路と訳す。愚者として有名であるが、阿羅漢となる。

6　『大智論』に、「諸法実相を除いて、其の余の一切は、皆な是れ魔事なり」『大智度論』巻第五、「除諸法実相、余残一切法、尽名為魔」（T25, 99b19-20）を参照。

故に但だ一実相印を用うるや。

答えて曰う。声聞は根純にして、著重きが故に、須らく三法印を説いて、生死の苦を厭いて、涅槃の楽を欣ばしむべし。菩薩は大悲ありて、根利にして悟り易し。生死は即ち涅槃の相にして、能く生死を捨てず、涅槃を取らず、不二の法門に入る。故に仏は但だ諸法実相印を説くなり。

問うて曰う。若し国に二主無しと言わば、大乗経は但だ一法の体を用うるのみ。声聞経は遂に三を以て体と為す。豈に三主の過に非ずや。

答えて曰う。君は強くば、輔相[7]を須いず。君は弱くば、則ち輔相と共に国を治むるが如し。声聞経は、法相の理弱きが故に、三印の治を須(ま)って愛を破り、無常を観じて見を破り、無我を観ず。若し苦忍の真明に入らば、俱に寂滅を得るなり。

第二節　偽を簡び真を顕わす

第二に偽を簡んで真を顕わすを明かすとは、則ち三意と為す。一には正しく偽を簡んで真を顕わすを明かす。二に共･不共の教に約して、同異を簡別(けんべつ)す。三に諦に約して、去取(こしゅ)[8]を明かす。

第一項　正しく偽を簡び真を顕わすを明かす

一に偽を簡んで真を顕わすを明かすとは、実理は幽微にして、真偽は別かち難し。但だ凡夫の習う所は、若しは教、若しは行、各おの以て真と為さざるは莫し。故に学を尋ぬるの徒は、必ず須らく自ら智力を以て、真偽を研覈(けんかく)[9]すべし。此れに就いて即ち二意と為す。一に実相に非ざるを簡ぶ。二に正しき実相を顕わす。

7　輔相　宰相の意。

8　去取　取捨すること。「去」は、捨てること。

9　研覈　是非、善悪などを明らかにすること。

第一目　実相に非ざるを簡ぶ

一に実相に非ざるを簡ぶとは、即ち三と為す。一に世俗の経書に明かす所は、実相に非ず。二に外人の経書に明かす所は、実相に非ず。三に声聞経の教に明かす所は実相に非ず。

1.　世俗の経書の明かす所は実相に非ず

一に世間の経書に明かす所は実相に非ずとは、世間の経書に明かす所は、但だ国を安んじ家を治めんが為めなり。善を賞し悪を罰す。仁・義・礼・智・誠信・孝敬は、生を養い性を養うの道にして、皆な是れ愛論なり。乃至、釈提桓因の種種の善論、諸の梵天王の説出欲論、五通[10]の人の神仙の論も、亦た皆な是れ愛の戯論に属す。戯論は慧眼を破りて、真実を見ず。是の故に皆な実相に非ざるなり。

2.　外人の経書の明かす所は実相に非ず

二に外人の経書に明かす所は実相に非ずと明かすとは、外道は多く身・辺・邪見を起こす。或いは神、及び世間は常にして、是の事は実にして、余は妄語なりと計す。乃至、或いは神、及び世間は非常非無常にして、是の事は実にして、余は妄語なりと計す。是くの如く十四難[11]に堕し、六十二見を生ず。各おの是れ実なりと謂うと雖も、実相に非ざるなり。其の各各見に因りて諸の煩悩を起こし、種種の行業を作して、生死に流転するを以て、是の故に諸有る言教は、皆な是れ見の戯論に属す。戯論は慧眼を破りて、真実を見ず。故に諸

10　五通　神足通・天眼通・天耳通・他心通・宿命通の五種の神通力のこと。これに漏尽通を加えて、六通、六神通という。

11　十四難　十四の形而上学的な問題。釈尊は、これに対して答えなかった。具体的には、世界は (1) 常であるか、(2) 無常であるか、(3) 常かつ無常であるか、(4) 常でも無常でもないか、(5) 有辺であるか、(6) 無辺であるか、(7) 有辺かつ無辺であるか、(8) 有辺でも無辺でもないか、(9) 如来は死後存するか、(10) 存しないか、(11) 存しかつ存しないか、(12) 存しも存しなくもないか、(13) 個我と身体は同じか、(14) 異なるか、である。

法実相に非ざるなり。

3.　声聞経に明かす所は実相に非ず

三に声聞経の教は実相に非ずと明かすとは、声聞経は多く無常・無我を明かし、諸法を破壊して、苦を尽くす涅槃を説く。且つ声聞の人は生死を厭畏(おんい)し、無常を観じ結を断じて、即身に涅槃に入らんと欲して、深く諸法実相を求むること能わざるが故に、実相を明かさざるなり。

第二目　正しき実相を顕わす

二に真の実相を顕わすとは、摩訶衍の教の明かす所は、利根の菩薩の為めに法相の如く説く。多く第一義悉檀を明かし、菩薩は大悲もて衆生の為めにす。故に無上道を求め、劫数を計らず、深く諸法を観じて、二辺に滞らず、一心は常に寂す。水の澄(す)清み、珠の相の自ら現ずるが如く、諸法実相を得。故に摩訶衍経の教の明かす所には、真の諸法実相有り。真の諸法実相とは、即ち不思議真性解脱にして、此の経の体なり。

第二項　共・不共の教に約して同異を簡別す

二に共・不共の教に約して同異を簡別すとは、此れに就いて即ち二と為す。一に共の二乗に約して般若を説き、法性・実相に同有り異有るを明かす。二に不共の二乗に約して般若を説き、法性・実相は但だ異にして同に非ざるを明かす。

第一目　共の二乗に約して般若を説く

一に共般若[12]に約して法性・実相を明かし、大乗経の体に同有り異有りと為すとは、即ち三意と為す。一に通教に約し、二に別教に約し、三に円教に約す。

12　共般若　般若には三乗の人が共に学ぶ共般若＝通教と、菩薩だけが学ぶ不共般若＝別教・円教がある。

1. 通教に約す

一に通教に約して同異を明かすとは、言う所の同とは、即ち是れ同じく偏真の[555c]法性に入るなり。言う所の異とは、三乗は同じく法性に入ると雖も、浅深の異なり無きに不(あら)ず。但だ正使を断じ、習を侵すのみ。習の尽くるは、前の通教に分別するが如し。声聞は入ること浅く、但だ正使を断じ、縁覚は小しく深く、習気を侵除し、菩薩は能く法性の底を窮め、習気は都(すべ)て尽くるなり。譬えば三獣の河を渡るが如し。水は是れ一なりと雖も、兎・馬・象の脚に、短・長有り。故に水に入るに、浅深の別無きに不(あら)ず。水は是れ一なりと雖も、深浅に異なり有るなり。

2. 別教に約す

二に共説の般若に約して、別教に空・不空を明かして、法性の同異を辨ずとは、『涅槃経』に云わく、「第一義空を、名づけて智慧と為す。智者は空、及与(およ)び不空を見る。声聞・辟支仏は、但だ空のみを見て、不空を見ず」[13]と。声聞・菩薩は、同じく空を見る。是れ則ち法性の理は一にして、之れを名づけて同と為す。菩薩は能く不空を見る。不空は即ち是れ智慧の性なるを、仏性を見ると名づく。即ち是れ異なるなり。譬えば三獣の河を渡るが如し。二獣は浮きて渡り、但だ水の軟なるを知るのみ。若し象は浮きて渡らば、出没して底に到り、浮かば水の軟なるを知り、底に到りて地に著(つ)かば、軟に非ざるを知るなり。

---

13 『涅槃経』に云わく、「第一義空を、名づけて智慧と為す。智者は空、及以び不空を見る。声聞・辟支仏 は、但だ空のみを見て、不空を見ず」『南本涅槃経』巻第二十五、師子吼菩薩品、「仏性者、名第一義空。第一義空名為智慧。所言空者、不見空与不空。智者見空及与不空、常与無常、苦之与楽、我与無我。空者一切生死、不空者謂大涅槃。乃至無我者即是生死、我者謂大涅槃。見一切空、不見不空、不名中道。乃至見一切無我、不見我者、不名中道。中道者、名為仏性。以是義故、仏性常恒、無有変易、無明覆故、令諸衆生不能得見。声聞、縁覚見一切空、不見不空、乃至見一切無我、不見於我。以是義故、不得第一義空。不得第一義空故、不行中道。無中道故、不見仏性」（T12, 767c18-768a1）を参照。

問うて曰う。不空は当有の為めの故に、不空を見ると名づくるや。空無きが為めの故に、不空と名づくるや。

答えて曰う。具さに二意有り。有の故に是れ不空ならば、智慧の性の故に空に非ざるなり。無の故に不空を説かば、真諦・法性の理は、即ち是れ空なり。此の空は畢竟して不可得なるが故に、故(ことさら)に不空と言う。不空と言うとは、即ち是れ真諦・法性の空に非ざるなり。故に『大智論』に云わく、「空に二種有り。一には但空、二には不可得空なり」[14] と。

声聞は唯だ但空を得るのみにして、智慧は猶お蛍光(けいこう)の如し。菩薩は但空を得、不可得空を得て、智慧は猶お日光の如し。二乗は同じく但空を得。故に名づけて同と為す。菩薩の不可得空を得るを、名づけて異と為すなり。譬えば土を掘るに、土を除けば泥に至り、泥を除けば水に至る[15] が如くなり。

3.　円教に約す

三に共説の般若の円教[16] に約して、不思議の法性・実相に同異有りと明かすとは、声聞は法性に入るに、唯だ法性を見るのみにして、虚空に所有無きが如し。菩薩・諸仏は法性・実相に入るに、亦た法性を見ること虚空の如し。能く虚空の如き法性の中に於いて、仏知見を開き、円かに法界の一切の法を照らすなり。同じく虚空の如き法性に入りて、所有無きが故に、之れを名づけて同と為す。

諸の仏・菩薩は、能く虚空の如き法性の中に於いて、円かに一切の法界を照らす。即ち是れ不思議(556a)の法性なるが故に、名づけて異と為すなり。故に身

14　『大智論』に云わく、「空に二種有り。一には但空、二には不可得空なり」『大智度論』巻第三十七、「空相応有二種。一者但空、二者不可得空」(T25, 335a17-18) を参照。

15　泥を除けば水に至る　底本の「除泥若円至水」を、『版本』の頭注、「『若円』の二字は、疑うらくは写錯ならん。当に『般』の字の下に置くべし」によって「除泥至水」に改める。

16　般若の円教　底本の「般若教」を、『版本』の頭注、「『若円』の二字は、疑うらくは写錯ならん。当に『般』の字の下に置くべし」によって「般若円教」に改める。ただし、底本には、「若」があるので、「若円」ではなく、「円」の一字を移動させる。

子は領解して云わく、「同共(とも)に一法の中に、此の事を得ず。嗚呼(うこ)して深く自ら責めき。云何んが而も自ら欺ける」[17]と。是れ則ち略して共般若をば、二乗に共じて説くを明かす。而も上・中・下根の利鈍は同じからざるが故に、一法性に於いて、通・別・円の三種の異なりあり。

譬えば石に金性有りて[18]、有る人は石を破って金を得れども、種種の釵[19]・瑞(みみだま)・環(たまき)・釧(くしろ)を作ること能わず、有る人は金を得て、能く用て種種の釵・瑞・環・釧を作れども、金を変じて丹[20]と為すこと能わず、有る人は、能く金を変じて丹を成じ、之れを服して仙を得て、五通無閡(むげ)なるが如し。金の性は是れ一なれども、得る者に三種の不同あるなり。

第二目　不共の二乗に約して般若を説く

二に不共に約して般若を説くに、法性・実相を大乗の経の体と為すに、一向に異なるを明かすとは、二乗の見る所は偏真にして、同と言うを得ざるなり。此れに就いて二意と為す。一に別教、二に円教なり。

1.　別教に約す

一に不共般若の別教に約して、法性･実相を明かすは、二障を断除し、生死･涅槃の二辺を離れ、別して不空の理・自性清浄心・如来蔵の理を以て、法性・実相と為す。是れ則ち声聞の座に在りて、聾の如く瘂の如くなり。譬えば鉱(あらがね)を破って真金を得て、頗梨(はり)[21]に異なるが如くなり。真金は破壊す可からず、意

17　身子は領解して云わく、「同共に一法の中に、此の事を得ず。嗚呼と深く自ら責めき。云何んが而も自ら欺ける」『法華経』譬喩品、「嗚呼深自責　云何而自欺　我等亦仏子　同入無漏法　不能於未来　演説無上道　金色三十二　十力諸解脱　同共一法中　而不得此事」（T9, 10c23-27）を参照。

18　石に金性有りて　『大智度論』巻第三十二、「法性名為本分種。如黄石中有金性、白石中有銀性」（T25, 298b19-21）を参照。

19　釵　「釵」と同字と理解して、かんざしの意とする。

20　丹　丹薬のこと。道家の作る不老不死の薬。

21　頗梨　sphaṭikaの音写語。水晶のこと。

に随いて種種の器を作る。頗梨は破り易く、回転して種種の器を作るを得ざるなり。

2.　円教に約す

二に不共般若の円教に約して、法性・実相を大乗経の体と為すと明かすとは、一切諸法は即ち是れ仏性・涅槃・如来蔵なり。是れ則ち二乗の座に在りて、聾の如く瘂の如くなり。譬えば如意宝珠の頗梨珠に非ざるが若し。豈に同じと言う可けんや。

第三項　三諦に約して去取を明かす

三に諦に約して分別すとは、法性・実相の理は諦を出でずと明かすなり。故に須らく諦に約して分別すべし。但だ諦に三種有るのみ。一には三諦、二には二諦、三には一諦なり。一に三諦に約して分別し、法性・実相を此の経の体と為すは、即ち二意と為す。

第一目　三諦に約す

一に略して三諦を明かす。二に去取を明かす。

1.　略して三諦を明かす

一に略して三諦を明かすとは、一に俗諦、二に真諦、三に中道第一義諦なり。三諦の義は、略して前の四教の所詮に分別するが如し。

2.　去取を明かす

二に去取とは、俗諦は但だ是れ凡人の見る所の理なるのみ。故に此の『経』の体に非ざるなり。真諦は即ち是れ二乗の見る所の理にして、亦た此の『経』の体に非ざるなり。中道第一義諦は、即ち是れ法性・実相にして、即ち此の『経』の正体なり。

第二目　二諦に約す

二に二諦に約して、法性・実相を分別するを、556b此の『経』の体と為すを明かすに、亦た二意と為す。一には略して二諦の相を明かし、二には去取なり。

1.　略して二諦の相を明かす

一に略して二諦の相を明かすとは、二諦に二種有り。一には理外の二諦、二には理内の二諦なり。

1.1.　理外の二諦を明かす

一に理外の二諦とは、仏性に約して以って二諦を明かすにあらざるなり。即ち是れ猶お門外に処して、草庵に止宿するがごとし[22]。今、此の理外の二諦を明かすに、則ち三種有り。一には随情の二諦、二には情智の二諦、三には随智の二諦なり。

1.1.1.　随情の二諦を明かす

一に随情の二諦を明かすとは、諸の論師の二諦義を撰ずるが如し。古今を集むるに、乃ち数十家有りて、二諦義を明かすこと同じからず。又た、諸の経論を尋ぬるに、二諦の相を明かす。亦た種種の不同有るなり。但だ二諦は既に是れ審実[23]の理なれば、何ぞ異説の不同なるを得ん。若し一家を是と為さば、衆家は併（あわ）せて非なり。孰（た）れか能く其の是を判ぜんや。今、三種の二諦を作し、衆家の明かす所の二諦を通釈す。若し文証有らば、則ち皆な用う可し。諸の経論の異説は、皆な滞ること無きなり。故に云わく、「諸仏は常に二諦に依りて説法す」[24]と。但だ二諦の理は、応に異なり有るべからず。而るに、諸

22　猶お門外に処して、草庵に止宿するがごとし　『法華経』信解品、「猶処門外　止宿草庵」（T9, 18a29）を参照。

23　審実　真実の意。

24　云わく、「諸仏は常に二諦に依りて説法す」『中論』巻第四、観四諦品、「諸仏依二諦　為衆生説法」（T30, 32c16）を参照。

師、及び衆(もろもろ)の経論の異説不同なりとは、皆な是れ随情の二諦なり。世界・為人・対治・第一義の四悉檀の辨ずる所の根情に随うなり。衆生の根情は、種種同じからず。仏の教えに明かす所の二諦は、何ぞ止(た)だ数十家の異なりあらん。乃ち無量の不同有り。故に『涅槃経』に云わく、「二諦を分別するに、無量の相有り。我れは彼の経に於いて、竟(つい)に之れを説かず」[25]と。此れは何を謂うや。而るに、末代は各おの一種の二諦を明かし、衆家の異説を受けず。将(は)た大失に非ざるや。

1.1.2.　随情智の二諦を明かす

二に隨情智の二諦を明かすとは、上に明かす所の種種の二諦の如し。世界・為人・対治の情に随いて、説を聞いて未だ悟らざるは、皆な束ねて世諦と為す。若し種種の異説の二諦は向道の人の為めならば、説を聞いて即ち悟り、真の慧眼を発し、第一義を見る。即ち是れ随智の真諦なり。是れ則ち情智合して二諦の殊なり有るを辨ず。故に『涅槃経』に云わく、「世人の心の見る所の者を、名づけて世諦と為し、出世の人の心の見る所を、名づけて第一義諦と為すが如し」[26]と。

1.1.3.　随智の二諦を明かす

三に隨智の二諦とは、二乗の聖人は、真無漏を発し、法眼・慧眼の見る所の二諦の理なり。若し凡の為めに説かば、盲者に白相を示すが如し[27]。故に『妙

25　『涅槃経』に云わく、「二諦を分別するに、無量の相有り。我れは彼の経に於いて、竟に之れを説かず」『南本涅槃経』巻第十二、聖行品、「知四聖諦、有二種智。一者中、二者上。中者、声聞・縁覚智。上者、諸仏・菩薩智。善男子、知諸陰苦、名為中智。分別諸陰有無量相、悉是諸苦、非諸声聞・縁覚所知、是名上智。善男子、如是等義、我於彼経、竟不説之」(T12, 684a23-28) を参照。

26　『涅槃経』に云わく、「世人の心の見る所の者を、名づけて世諦と為し、出世の人の心の見る所を、名づけて第一義諦と為すが如し」『南本涅槃経』巻第十二、聖行品、「如出世人之所知者、名第一義諦、世人知者、名為世諦」(同前, 684c17-18) を参照。

27　盲者に白相を示すが如し　『南本涅槃経』巻第十三、聖行品、「如生盲人不識乳色、便問他言、乳色何似。他人答言、色白如貝。盲人復問、是乳色者、如貝声耶。答言、不

勝定経』に明かす。文殊と釈迦は、因地に二諦義を諍いて、556c三悪道に堕す。迦葉仏の二諦を説くを見る[28]。即ち是れ随智の二諦は情を以て求む可からざるを顕わすなり。若し情を以て求めて執諍せば、則ち釈迦と文殊の因地に随情の二諦に執する過罪[29]に同じきなり。

問うて曰う。二諦は為(は)た定んで是れ理なるや、為た定んで是れ教なるや。

答えて曰う。有る師の言わく、並びに是れ理なり。有る師の言わく、二諦は並びに是れ教なり。有る師の言わく、俗諦は是れ教にして、真諦は是れ理なり。故に『経』に云わく、「皆な世諦の名字を以ての故に、第一義に非ずと説く」[30]と。今、此の三家の義を明かすを詳(つまび)らかにするに、互いに得失有るなり。応に四句分別すべし。若し随情の二諦に約さば、二諦は並びに是れ教なり。是れ則ち二諦は皆な説く可きなり。故に種種の二諦有り。諸の師の用うる所は、同じからず。経論に明かす所は、各おの別なり。若し随情智の二諦に就かば、即ち俗諦は是れ教にして、真諦は是れ理なり。是れ則ち俗は是れ説く可く、真は説く可からざるなり。若し随智の二諦に就かば、二諦は皆な是れ理なり。是れ則ち二諦は皆な説く可からざるなり。若し随智の世諦に約さば、随情の真諦は、是れ則ち俗は是れ説く可からざるなり。是(ここ)を以て迦葉如来の証見す

也。復問、貝色為何似耶。答言、猶稲米末。盲人復問、乳色柔軟如稲米末耶。稲米末者、復何所似。答言、猶如雨雪。盲人復言、彼稲米末冷如雪耶。雪復何似。答言、猶如白鶴。是生盲人雖聞如是四種譬喩、終不能得識乳真色」（同前, 688c15-23）を参照。

28　『妙勝定経』に明かす。文殊と釈迦は、因地に二諦義を諍いて、三悪道に堕す。迦葉仏の二諦を説くを見る　『最妙勝定経』、「仏告阿難、我自憶往昔作多聞士、共文殊諍利、諍有無二諦。文殊言有、我言無也。由是諍論而不能定二諦有無。死堕三悪道、服熱鉄丸。経無量劫、従地獄出。値迦葉仏為我解説有無二諦。迦葉仏言、一切諸法、皆無定性。汝言有無、是義不然。何以故。一切万法、皆悉空寂。此二諦者、亦有亦無。汝今解者、但解文義、不解深義。汝於此義、如盲如聾、云何解此甚深之義」（ZW1［『蔵外仏教文献』第一輯］, 342a13-19）を参照。

29　罪　底本の「非」を、宋本によって「罪」に改める。

30　『経』に云わく、「皆な世諦の名字を以ての故に、第一義に非ずと説く」　『大品般若経』巻第二十五、実際品、「第一義中無有色、乃至無阿耨多羅三藐三菩提、亦無行阿耨多羅三藐三菩提者。是一切法皆以世諦故、説非第一義」（T8, 404a11-13）を参照。

る所は、尚お釈迦・文殊の因地の情の知る所に非ず。況んや復た末代の凡夫の能く解する所をや。

今、略して此の三種の二諦を明かすに、言は多からずと雖も、意は則ち該ねざる所靡し。仏法の義学・坐禅の人は、若し此れを信ぜずば、疑諍は豈に息まんや。

1.2.　理内の二諦を明かす

二に次に理内の二諦を明かすとは、中道仏性に約して、以て二諦を明かすなり。此れに就いて三種有ることを得。一には中道もて真を合して二諦を明かす。二には真諦もて俗を合して二諦を明かす。三に不思議の二諦なり。此の三種の二諦も、亦た各おの随情・情智・随智の三種なり。

1.2.1.　中道もて真を合して二諦を明かす

一に中道仏性もて真諦を合して二諦と為すとは、猶お是れ通教の二諦なり。祇だ二乗に通ずるのみに非ず、亦た別に通じ円に通ずるなり。言う所の中道もて真を合するを第一義諦と為すとは、『涅槃経』に云わく、「仏性と言うは、即ち是れ第一義空なり。第一義空を、名づけて智慧と為す。智者は、空、及与び不空を見る」[31] と。「不空」は、即ち是れ中道なり。「空」は、即ち是れ真諦なり。故に知んぬ、中道仏性もて真諦を合するを、第一義諦と為すなり。亦た三種の二諦有り。前に類して知る可し。

31　『涅槃経』に云わく、「仏性と言うは、即ち是れ第一義空なり。第一義空を、名づけて智慧と為す。智者は、空、及与び不空を見る」『南本涅槃経』巻第二十五、師子吼菩薩品、「仏性者、名第一義空。第一義空名為智慧。所言空者、不見空与不空。智者見空及与不空、常与無常、苦之与楽、我与無我。空者一切生死、不空者謂大涅槃。乃至無我者即是生死、我者謂大涅槃。見一切空、不見不空、不名中道。乃至見一切無我、不見我者、不名中道。中道者、名為仏性。以是義故、仏性常、恒、無有変易、無明覆故、令諸衆生不能得見。声聞、縁覚見一切空、不見不空、乃至見一切無我、不見於我。以是義故、不得第一義空。不得第一義空故、不行中道。無中道故、不見仏性」(T12, 767c18-768a1) を参照。

1.2.2.　真諦もて俗を合して二諦を明かす

二に真諦もて俗諦を合するを明かす。但だ中道を取りて真諦と為す。此の真諦を明かすとは、即ち是れ別教の二諦なり。言う所の真諦もて俗諦[557a]を合するを世諦と為すとは、『大涅槃経』に云わく、「我れは弥勒と共に俗諦を説くに、五百の声聞は、皆な第一義諦を説くと謂う」[32]と。此れは即ち別教の二諦なり。亦た三種の二諦有ることを得。前に類して知る可きなり。

1.2.3.　不思議の二諦を明かす

三に理内の不思議の二諦を明かすとは、前に理内の二種の二諦を明かす。不二にして二なるは、是れ不思議の円教の二諦なり。亦た三種の二諦有り。前に類して知る可きなり。

2.　去取を明かす

二に去取を明かすとは、若し理外の二諦ならば、但だ世諦に非ず、此の『経』の体に非ず。真諦も亦た非なり。若し理内の二諦の三種の世諦ならば、亦た皆な此の『経』の体と為すことを得ざるなり。理内の三種の真諦は、即ち是れ法性・実相なり。此の『経』の正体なり。

問うて曰う。祇（た）だ応に円教の不思議の真諦を取りて体と為すべきのみ。何ぞ理内の通・別の真諦を取りて体と為すことを得んや。

答えて曰う。若是（も）し『法華経』は「正直に方便を捨てば」[33]、但だ円教の一真諦のみを用て体と為すことを得可し。此の『経』は、猶お通・別の二種の方便を帯ぶ。理内の三種の真諦は、皆な此の『経』の体と為すことを得るなり。但

32　『大涅槃経』に云わく、「我れは弥勒と共に俗諦を説くに、五百の声聞は、皆な第一義諦を説くと謂う」『南本涅槃経』巻第三十二、迦葉菩薩品、「我往一時在耆闍崛山与弥勒菩薩共論世諦、舎利弗等五百声聞、於是事中、都不識知。何況出世第一義諦」（同前, 821c5-8）、同巻第十五、梵行品、「如来有時演説世諦、衆生謂仏説第一義諦」（同前, 708a10-11）を参照。

33　『法華経』は「正直に方便を捨てば」『法華経』方便品、「今我喜無畏　於諸菩薩中　正直捨方便　但説無上道」（T9, 10a18-19）を参照。

だ傍・正有るのみ。不思議の真諦を正と為すなり。

第三目　一諦に約す

三に一実諦に約して此の『経』の体と為すとは、一実諦の義は、前に分別するが如し。但だ一実諦は、即ち是れ不思議真性解脱・実相の理なり。即ち是れ此の『経』の正体なり。事は初重に『涅槃経』を引いて解釈するが如きなり。

第三節　四門より体に入るを明かす

第三に四門より体に入るを明かすとは、真性・実相の体を尋ぬるに、幽微妙絶にして、一切世間に之れに能く契(かな)うもの莫(な)し。但だ大聖の明鑒通理[34]の門を以て、乃ち無言の理に於いて、縁に赴き教を起こす。教を以て門と為す。是を以て教を稟くるの徒は、門に因(よ)りて理に契(かな)う。故に『法華経』に云わく、「仏の教門を以て、三界の苦を出ず」[35]と。又た云わく、「其の智慧の門は、解し難く入り難し」[36]と。此の『経』に、諸の菩薩は各おの入不二法門を説くを明かす[37]は、即ち其の意なり。今、略して三意を以て解釈す。一に略して四門の相を辨じ、二に正しく四門より体に入るを明かし、三に悉檀もて四門の教を起こすを明かす。

第一項　略して四門の相を辨ず

第一に略して四門の相を辨ずとは、門は能通を以て義と為す。仏の教の

34　明鑒通理　明察して道理に通じること。

35　『法華経』に云わく、「仏の教門を以て、三界の苦を出ず」『法華経』譬喩品、「若見無量億千衆生、以仏教門、出三界苦怖畏険道、得涅槃楽、如来爾時便作是念」(T9, 13c3-5) を参照。

36　云わく、「其の智慧の門は、解し難く入り難し」『法華経』方便品、「諸仏智慧甚深無量、其智慧門難解難入、一切声聞・辟支仏所不能知」(同前, 5b25-27) を参照。

37　此の『経』に、諸の菩薩は各おの入不二法門を説くと明かす　『維摩経』巻下、入不二法門品 (T14, 550b28-551c26) において、三十二人の菩薩 (法自在菩薩から楽実菩薩までの三十一人の菩薩と文殊菩薩を合わせた数) が不二法門に入ることについて解説したことを指す。

詮ずる所は、正しく四句の法にして、能く行人を通じて、真性・実相の体に至らしむ。故に名づけて門と為す。若し外人ならば、邪因縁・無因縁もて四句を説く。此の四句に因りて、各おの四種の邪法の理を見る。此れに因りて十四難・六十二見を生じ、諸の結業を起こし、生死[557b]に沈淪[38]す。此れは是れ邪道の四門なり。今、述べざる所なり。若し仏法の四門ならば、即ち是れ正因縁の四句の法にして、能く行人を通じて、同じく第一義涅槃に入らしむるなり。故に『大智論』に云わく、「四門より清涼池に入る」[39]と。又た、「般若を譬うるに、大火炎の如し。四辺、取る可からず」[40]と。又た、「般若波羅蜜に四種の相有り」と云う[41]は、即ち四門の義なり。仰いで仏法を尋ぬるに、既に四教の不同有り。今、教に約して門を明かすに、各おの四別有り。一に三蔵の四門、二に通教の四門、三に別教の四門、四に円教の四門なり。

第一目　三蔵教の四門を明かす

一に三蔵教の四門を明かすに、即ち四と為す。一に有門、二に空門、三に有空門、四に非有非空門なり。

38　淪　底本の「輪」を、文意によって「淪」に改める。

39　『大智論』に云わく、「四門より清涼池に入る」『大智度論』巻第八十三、「釈曰、須菩提意、以四種門雖安隠、以甚深故、利根者乃得入。仏答、無不入者。須菩提明智慧利根者能入、佛意但一心精進欲学者可入。譬如熱時、清涼池、有目有足皆可入」（T25, 640c7-11）を参照。

40　「般若を譬うるに、大火炎の如し。四辺、取る可からず」『大智度論』巻第十八、「般若波羅蜜　譬如大火焔　四辺不可取　無取亦不取」（同前, 190c23-24）を参照。

41　「般若波羅蜜に四種の相有り」と云う　『大智度論』巻第六十五、「問曰、須菩提何以作是問、有法無法空故、般若波羅蜜不為転、不為還故出。而仏還以空答。答曰、有人説、諸法有四種相。一者説有、二者説無、三者説亦有亦無、四者説非有非無。是中邪憶念故四種邪行、著此四法故、名為邪道。是中正憶念故四種正行、中不著故、名為正道。是中破非有非無、故名無法有法空。仏説乃至破非有非無、故説無有転。無有還」（同前, 517b20-28）を参照。

1.　有門

一に有門とは、即ち三蔵教に正因縁生滅の有を明かす。若し此の教を稟けば、能く十六知見を破る。陰・界・入の一切有為諸法を見るに、皆悉(みな)な無常・苦・空・無我にして、世第一法を得、真無漏を発す。有に因りて真を見る。有は即ち第一義諦の門なり。故に『大集経』に云わく、「甚深の理は説く可からず。第一実義に、声字無し。陳如比丘は、諸法に於いて真実の知見を獲得す」[42]と。此の如きは、即ち諸の『阿毘曇論』の申ぶる所なり。

2.　空門

二に空門を明かすとは、即ち是れ三蔵教は、正因縁の仮・実の法の生滅を析[43]して空に入るを明かす。若し此の教を稟けば、能く仮･実の惑を破り、仮･実の空を見て、真無漏を発す。空に因りて真を見る。空は即ち第一義の門なり。故に須菩提は、石室に在りて、生滅無常を観じて空に入る。空に因りて道を得るを、仏の法身を見ると名づく[44]。恐らくは此れは是れ『成実論』の申ぶる所なり。

42　『大集経』に云わく、「甚深の理は説く可からず。第一実義に、声字無し。陳如比丘は、諸法に於いて真実の知見を獲得す」『大方等大集経』巻第二、「爾時世尊説四諦時、憍陳如比丘得法眼浄、其声遍聞三千大千世界。爾時世尊説優陀那。甚深之義不可説　第一実義無声字　憍陳比丘於諸法　獲得真実之知見　即是我往無量世　所得菩提今已得」(T13, 13c10-15) を参照。

43　析　底本の「折」を、宋本によって「析」に改める。

44　須菩提は、石室に在りて、生滅無常を観じて空に入る。空に因りて道を得るを、仏の法身を見ると名づく　『大智度論』巻第十一、「爾時須菩提於石窟中住、自思惟、仏従忉利天来下、我当至仏所耶。不至仏所耶。又念言、仏常説。若人以智慧眼観仏法身、則為見仏中最。是時以仏従忉利天下故、閻浮提中四部衆集、諸天見人、人亦見天。座中有仏、及転輪聖王・諸天大衆、衆会荘厳、先未曾有。須菩提心念、今此大衆、雖復殊特、勢不久停、磨滅之法、皆帰無常。因此無常観之初門、悉知諸法空無有実。作是観時、即得道証」(T25, 137a2-11) を参照。

3. 有空門

三に有空門を明かすとは、即ち三蔵教は正因縁の生滅の有空を明かす。若し此の教を稟けば、能く有無に偏執するの惑を破り、因縁の有空を見て、真無漏を発す。有空に因りて真を見る。有空は、即ち第一義の門なり。此れは是れ迦旃延、道に入るに因るが故に、『昆勒論』を作りて、還（ま）た此の門を申ぶるなり。

4. 非有非無門

四に非有非無門とは、即ち三蔵教は正因縁の生滅の非有非空の理を明かす。若し此の教を稟けば、能く有無の辺の邪執を破り、因縁の非有非無を見て、真無漏を発す。非有非無に因りて真を見る。非有非無は、即ち第一義の門なり。悪口の車匿（しゃのく）[45]は、此れに因りて道に入る。未だ論の度るを見ず。有る人の言わく、「犢子の阿毘曇は、此の意を申ぶるなり。557c 彼の論に、我（が）は第五の不可説蔵の中に在るを明かす[46]。我は三世に非ざるは、即ち是れ有に非ず。無為[47]法に非ざるは、即ち是れ空に非ざるなり」と。此れは恐らく未だ定んで用

45　悪口の車匿　車匿はChaṇḍakaの音写語。釈尊が出城するときの馭者であった。後に出家したが、生来の悪口が改まらなかったので、悪口車匿、悪性車匿と呼ばれた。『止観輔行伝弘決』巻第六、「悪口車匿依梵法治。若心調柔軟、当為説那陀迦旃延経。離有離無、乃可得道」（T46, 335c8-10）を参照

46　犢子の阿毘曇は、此の意を申ぶるなり。彼の論に、我は第五の不可説蔵の中に在るを明かす　「犢子」は、もと外道であったが、後に仏弟子となった。犢子部（小乗二十部の一つ）の部主である。衆生に実我があり、五陰に即するのでもなく、離れるのでもなく、不可説蔵の中に説かれると主張した。『大智度論』巻第一、「是仏法中亦有犢子比丘説、如四大和合有眼法、如是五衆和合有人法。犢子阿毘曇中説、五衆不離人、人不離五衆、不可説五衆是人、離五衆是人、人是第五不可説法藏中所摂」（T25, 61a21-25）を参照。また、『摩訶止観』巻第十上、「犢子読舎利弗毘曇、自制別義言、我在四句外第五不可説蔵中。云何四句。外道計色即是我、離色有我、色中有我、我中有色。四陰亦如是。合二十身見」（T46, 132b24-27）を参照。

47　無為　底本の「無」を、宋本によって「無為」に改める。また、『四教義』巻第三、「我非三世、即非見有。非無為法、即是非見空也」（T46, 729b25-26）、『法華玄義』巻第八下、「我非三世、故非有我。非無為、故非無我」（T33, 784c13-14）を参照。

う可からず。

第二目　通教の四門を明かす

二に通教の四門を明かすとは、即ち是れ『智度論』に、「一切は実、一切は不実、一切は亦実亦不実、一切は非実非不実なり」と明かす[48]。仏は此の四句に於いて、広く第一義悉檀を説く。『中論』に此の四句を明かすに、皆な諸法の実相と名づく[49]。即ち通教には、正因縁の法は、夢・幻・響・化・水月・鏡像の如き[50]体法即空の四句を明かすなり。若し三乗は共に此の教を稟けば、而も根縁は同じからず、各おの一句に於いて、第一義に入る。故に四句は皆な門と名づくるなり。此れは具さに青目（しょうもく）の注解の如し[51]。又た、注に云わく、「諸法実相に三種有り」[52]と。故に知んぬ、此の四門は、即ち是れ三乗は同じく此の四門に入り、第一義を見るなり。

48　『智度論』に、「一切は実、一切は不実、一切は亦実亦不実、一切は非実非不実なり」と明かす　『大智度論』巻第一、「一切実、一切非実、及一切実亦非実、一切非実非不実、是名諸法之実相。如是等処処経中説第一義悉檀」（T25, 61b14-16）を参照。

49　『中論』に此の四句を明かすに、皆な諸法の実相と名づく　『中論』巻第三、観法品、「諸法実相者　心行言語断　無生亦無滅　寂滅如涅槃　一切実非実　亦実亦非実　非実非非実　是名諸仏法　自知不随他　寂滅無戯論　無異無分別　是則名実相」（T30, 24a3-8）を参照。

50　夢・幻・響・化・水月・鏡像の如き　『維摩経』巻下、菩薩行品、「有以夢・幻・影・響・鏡中像・水中月・熱時炎、如是等喩而作仏事」（T14, 553c24-25）を参照。

51　具さに青目の注解の如し　『中論』巻第三、観法品、「為度衆生或説一切実、或説一切不実、或説一切実不実、或説一切非実非不実。一切実者、推求諸法実性、皆入第一義平等一相。所謂無相。如諸流異色異味入於大海、則一色一味。一切不実者、諸法未入実相時、各各分別観皆無有実。但衆縁合故有。一切実不実者、衆生有三品、有上中下。上者、観諸法相非実非不実。中者、観諸法相一切実一切不実。下者智力浅故、観諸法相、少実少不実。観涅槃無為法不壊故実、観生死有為法虚偽故不実。非実非不実者、為破実不実故、説非実非不実」（T30, 25a16-28）を参照。

52　注に云わく、「諸法実相に三種有り」　『中論』巻第三、観法品、「仏説実相有三種。若得諸法実相、滅諸煩悩、名為声聞法。若生大悲発無上心、名為大乗。若仏不出世、無有仏法時、辟支佛因遠離生智。若仏度衆生已、入無余涅槃、遺法滅尽。先世若有応得道者、少観厭離因縁、独入山林、遠離憒鬧得道、名辟支仏」（同前, 25b23-29）を参照。

第三目　別教の四門を明かす

三に別教の四門を明かすとは、若し『中論』の「亦た仮名[53]と名づく」[54]を用いて、四門を辨ぜば、即ち別教の四門なり。『大智論』の四句[55]も亦た得るなり。此の別教の四門の意は、正しく『大涅槃経』に出ず。但だ多く散説す。乳に約して四句の譬を明かすは、即ち是れ別教の四門なり。若し仏性を明かすに、乳に酪性有り[56]、石に金性有り[57]、力士の額珠[58]の如くば、即ち有門なり。若し石に金性無く、乳に酪性無く、衆生の仏性は、猶お虚空の如く[59]、大涅槃も空、迦毘羅城も空なり[60]と明かさば、即ち是れ空門なり。『涅槃』に又た云わく、「仏性は亦有亦無なりとは、云何んが有と為すや。一切衆生は悉皆ごとく有なるが故なり。云何んが無と為すや。善方便に従いて見ることを得るが故なり」[61]と。又た、譬えば乳の中に亦た酪性有り、亦た酪性無きが如し。即ち是れ亦有亦無門なり。若し仏性は即ち是れ中道なり[62]と明かさば、百非もて

53　仮名　底本の「名」を、『版本』によって「仮名」に改める。

54　『中論』の「亦た仮名と名づく」　『中論』巻第四、観四諦品、「衆因縁生法　我説即是無　亦為是假名　亦是中道義」（同前, 33b11-12）を参照。

55　『大智論』の四句　前注48を参照。

56　若し仏性を明かすに、乳に酪性有り　『南本涅槃経』巻第二十六、師子吼菩薩品、「一切衆生悉有仏性、如乳中有酪」（T12, 775a26-27）を参照。

57　石に金性有り　前注18を参照。

58　力士の額珠　『南本涅槃経』巻第八、如来性品、「譬如王家有大力士。其人眉間有金剛珠」（同前, 649a9）を参照。

59　衆生の仏性は、猶お虚空の如く　『南本涅槃経』巻第三十一、迦葉菩薩品、「我又説言、衆生仏性猶如虚空」（同前, 815c1）を参照。

60　大涅槃も空、迦毘羅城も空なり　『南本涅槃経』巻第二十四、光明遍照高貴徳王菩薩品、「大般涅槃亦空。是故菩薩見一切法皆悉是空。是故我在迦毘羅城告阿難言、汝莫愁悩・悲泣・啼哭」（同前, 765c20-22）を参照。

61　『涅槃』に又た云わく、「仏性は亦有亦無なりとは、云何んが有と為すや。一切衆生は悉皆ごとく有なるが故なり。云何んが無と為すや。善方便に従いて見ることを得るが故なり」　『南本涅槃経』巻第二十五、師子吼菩薩品、「云何為有。一切衆生悉皆有故。云何為無。従善方便而得見故。云何非有非無。虚空性故」（同前, 770c4-6）を参照。

62　仏性は即ち是れ中道なり　『南本涅槃経』巻第三十二、迦葉菩薩品、「是故如来宣説

双遣す[63]。故に『経』に譬えて、「乳の中に酪性有るに非ず、酪性無きに非ず」と云う[64]は、即ち是れ非空非有門なり。別教の菩薩は、別して此の四門の教を稟け、仏性を見るに因りて、大涅槃に住す。故に此の四句の説は、即ち是れ別教の四門なり。今、一往、『涅槃経』の文に約して、別教の四門の相を分別す。但だ此の『経』の文は、或いは円教の四門なる可し。下の円教の四門に至りて、自ら当に同異を料簡すべきなり。

問うて曰う。別教の四門の若きは、但だ『涅槃』に出ずるのみ。爾の前の諸の『摩訶衍経』に、何の意ぞ別教の四門無きや。

答えて曰う。『大涅槃経』は、是れ前の経教[558a]を解する経なり。此の前の諸の摩訶衍は、豈に別教の四門無からん。具さに経文に出ず。事は繁きを成ずるなり。

第四目　円教の四門を明かす

四に円教の四門を明かすとは、四門より仏性第一義に入るを明かす。一往、別教の四門に第一義諦に入り、仏性を見て、常住の涅槃を得ると、名義は是れ同じ。細(くわ)しく意趣を尋ぬるに、異なり有り。

問うて曰う。何れの相を以て異なりを知るや。

答えて曰う。異なり有るを分別するに、意は乃ち多塗なり。今略して円教の七義に約して分別す。即ち知んぬ、別教の四門と円教の四門に殊なり有るなり。

七義とは、一に若し一切法は即ち真性・実相・仏性・涅槃の復た滅す可からざるを明かして、四門を明かさば、即ち是れ円教の四門なり。二に初心に即

仏性即是中道、非内、非外、故名中道」(同前, 819a5-6) を参照。

63　百非もて双遣す　「百非」は、あらゆる否定の意。「双遣」は、有と無をどちらも否定すること。

64　『経』に譬えて、「乳の中に酪性有るに非ず、酪性無きに非ず」と云う　『南本涅槃経』巻第三十二、迦葉菩薩品、「若言乳中定有酪者、酪中亦応定有乳性。何因縁故乳中出酪、酪不出乳。若無因縁、当知是酪本無今有。是故智者応言、乳中非有酪性、非無酪性」(同前, 819c21-25) を参照。

ち仏知見を開き、円かに照らすを明かして、四門を辨ぜば、即ち円教の四門なり。三に若し不思議に煩悩を断ぜずして涅槃に入るを明かして、四門を辨ぜば、即ち是れ円教の四門なり。四に若し円行を明かして、四門を辨ぜば、即ち是れ円教の四門なり。五に若し円位を明かして、四門を辨ぜば、即ち是れ円教の四門なり。六に若し円体を明かして、四門を辨ぜば、即ち是れ円教に四門を明かすなり。七に若し円用を明かして、四門を辨ぜば、即ち是れ円教に四門を明かすなり。

第二項　正しく四門より体に入るを明かす

第二に正しく四門より体に入るを明かすとは、若し外人の四門ならば、心は理の外に行ず。諸の顛倒の想は、顛倒と相応して、真性の体に入ることを得ず。所以は何ん。門に随うことは異なるが故に、理を見ることも亦た異なる。是の故に各おの説いて、一究竟道を得るを謂いて、諍論を起こすなり[65]。今明かす。仏法の四門は、皆な一体に入ることを得るに、但だ両種の不同有るのみ。一には三蔵・通教の両種の四門より同じく偏真の理に入る。二には別・円の両教の四門は、同じく円真の理に入る。

第一目　三蔵・通教の両種の四門より同じく偏真の理に入る

一に三蔵の四門、通教の四門より同じく偏真の理に入るを明かすとは、各おの四門に因りて、同じく第一義を見て、二種の涅槃を得るは、是れ同じきなり。理は是れ一なりと雖も、門に異なり有るとは、既に巧・拙の両度の殊なり有るが故に、両種の四門の能通の別有るなり。真理に二無きが故に、所通の至体[66]は是れ一なり。譬えば州城に四門を開くも、使君[67]は是れ一なるが

65　各おの説いて、一究竟道を得るを謂いて、諍論を起こすなり　『大智度論』巻第十八、「問仏言、一究竟道、為衆多究竟道。仏言、一究竟道、無衆多也」（T25, 193b10-12）を参照。

66　至体　究極の本体の意。

67　使君　天子によって派遣される使者の意。

如し。而して四門従り入る者の門に殊なり有りと雖も、見る所の使君は祇だ是れ一なり。三蔵教の四門は、州城の四辺の偏門従り而も入るが如し。通教の四門は、四の正門従り558b而も入るが如し。偏・正は殊なりと雖も、偏真の第一義諦に入見して、二種の涅槃を得るは、是れ一なり。

第二目　別・円の両教の四門より同じく円真の理に入る

二に別教の四門、円教の四門より実相・真性の体に入るを明かすとは、各おの四門に因りて実相・仏性に入見して、常住の涅槃を得るは、是れ一なり。理は是れ同じと雖も、門に異なり有るは、教門に既に偏・円の殊なり有るが故に、両種の四門の能通の異なり有るなり。仏性の真理は二ならざるが故に、故（ことさら）に所通の至真の性体は、是れ一なり。譬えば台城に四門有り、門は同じからずと雖も、見る所の天子は是れ一なるが如きなり。別教の四門は、台城の四辺の偏門従り而も入るが如し。円教の四門は、四の正門従り而も入るが如し。偏正は殊なりと雖も、真性・解脱・実相の体に入見するは、是れ一なり。

第三項　悉檀もて四門の教を起こすを明かす

第三に四悉檀を用て、四門の教を起こすを明かすとは、若し外道の四門ならば、皆な根縁を見ず、執心もて相を取りて定んで説く。旧医は常に乳薬を用て、一切の病を治するが如し。此れは四悉檀に依って四門を起こさざるなり。今、仏法の四門は、皆な四悉檀に因りて起こるなり。一に悉檀もて三蔵教の四門を起こすを明かす。二に悉檀もて通教の四門を起こすを明かす。三に悉檀もて別教の四門を起こすを明かす。四に悉檀もて円教の四門を起こすを明かす。

第一目　四悉檀を用て三蔵教の四門を起こす

一に四悉檀もて三蔵教の四門を起こすを明かすとは、即ち是れ生生不可説なり。四悉檀の因縁有らば、亦た説くことを得可し。

1.　四悉檀を用て三蔵教の有門を起こす

一に四悉檀を用て有門を起こすを明かすとは、若し衆生は心に有法を楽(ねが)わば、即ち世界悉檀を用て、『毘曇』の有門を説く。若し生善を聞くに宜しくば、即ち各各為人悉檀を用て、有門を説く。若し無因縁・邪因縁を執し、或いは空を執して取著し、諸の結業を起こさば、即ち対治悉檀を用て、為めに有門を説く。若し聞いて即ち悟り、第一義を見ば、即ち第一義悉檀を用て、為めに有門を説く。拘隣[68]の五人は、四諦を説くを聞いて、即ち第一義諦を見、須陀洹果を得るが如し。若し四悉檀を用て縁に赴[69]いて説くこと能わずば、即ち是れ機に差(たが)う。説法は是れ衆生の怨にして、天魔・外道の一手にして、諸の労侶[70]と作る。『涅槃経』に云わく、「説法とは、諸仏の境界にして、諸の声聞・縁覚の知る所に非ざるなり」[71]と。

2.　四悉檀を用て三蔵教の空門を起こす

二に四悉檀を用て空門を起こすを明かすとは、前の有門に類す。四悉檀を用て空門を起こすに、義は即ち成ずるなり。而して諸の成論師の云わく、『毘曇』の有門は、但だ是れ心(558c)を調うるのみにして、道を得ること能わず。『成実』の見空は、乃ち道を得るのみ」と。諸の数論師(しゅろんし)[72]の云わく、「我れは小乗に義を明かすを用て、有を見て道を得。汝は大乗に義を明かすを採用するが故に、空を見て道を得と説く」と。今謂わく、此れは並びに三蔵教の意を得ず。『大

68　拘隣　拘隣如ともいう。Ajñāta-kaundinyaの後部の音訳。五比丘の一人で、最初に悟りを得た人。阿若憍陳如とも音写する。

69　赴　底本の「起」を、宋本によって「赴」に改める。

70　労侶　疲れさせる伴侶の意。『維摩経』巻上、弟子品、「其施汝者、不名福田。供養汝者、堕三悪道。為与衆魔共一手作諸労侶、汝与衆魔、及諸塵労、等無有異」（T14, 540c7-10）を参照。

71　『涅槃経』に云わく、「説法とは、諸仏の境界にして、諸の声聞・縁覚の知る所に非ざるなり」『南本涅槃経』巻第三十一、迦葉菩薩品、「広略説法是佛境界、非諸声聞・縁覚所知」（T12, 811a4）を参照。

72　数論師　「数論」は、説一切有部、またはその部派の論書を指す。「数論師」は、その部派の人を指す。後に出るように、「数人」ともいう。

集経』に云わく、「常見の人は、異念に断ずと説く。断見の人は、一念に断ずと説く。二見は殊なりと雖も、道を得ること異なり無し」[73]と。『大智論』に云わく、「声聞経の中、処処に法空の義を明かす」[74]と。豈に空を見て道を得るは、大乗を探明すと言うことを得んや。今、此の四悉檀の意に約して、成壊の義を作す。数人の四義は成じ、『成論』の四義は壊す。『成論』の四義は成じ、数人の四義は壊す。是れ則ち成壊の敵は等し。何者か是れ『成論』は成じ、何者か是れ数人は壊す。若し三蔵教の巧・拙の両度[75]を解せば、則ち『成論』の空門の義は成じ、数人の有門の義は壊する者なり。

3.　四悉檀を用て三蔵教の有無門を起こす

三に悉檀を用て有無門を起こすを明かす。前の有門に類す。四悉檀の意を用いば、則ち有空門は起こることを得。故に『昆勒論』の通ずる所と為るなり。

4.　四悉檀を用て三蔵教の非有非無門を起こす

四に悉檀を用て非有非無門を起こすを明かすとは、四悉檀を用うること、亦た前の有門に類す。四悉檀の意を用うること見る可きなり。

第二目　四悉檀を用て通教の四門を起こす

二に四悉檀を用て通教の四門を起こすを明かす。三蔵教に類すること解す可し。

73　『大集経』に云わく、「常見の人は、異念に断ずと説く。断見の人は、一念に断ずと説く。二見は殊なりと雖も、道を得ること異なり無し」『大方等大集経』巻第二十二、声聞品、「断見之人言一念断、常見之人言八忍断、是二種人俱得決定、後離煩悩俱亦無妨」(T13, 158c2-3) を参照。

74　『大智論』に云わく、「声聞経の中、処処に法空の義を明かす」『大智度論』巻第十八、「如是等処処声聞経中、説諸法空」(T25, 193c1) を参照。

75　三蔵教の巧・拙の両度　通常は、三蔵教を拙度といい、通教を巧度というが、ここでは、三蔵教の有門を拙度といい、三蔵教の空門を巧度といっているようである。

第三目　四悉檀を用て別教の四門を起こす

三に四悉檀を用て別教の四門を起こすを明かす。三蔵教に類すること知る可し。

第四目　四悉檀を用て円教の四門を起こす

四に四悉檀を用て円教の四門を起こすを明かす。三蔵教に類すること知る可し。具さに釈するは、並びに『四教大本』に在り。

第四節　一法異門

第四に一法異名とは、諸経の異名は、真性・実相を説き、或いは一実諦と言い、或いは自性清浄心と言い、或いは如来蔵と言い、或いは如如と言い、或いは実際と言い、或いは実相般若と言い、或いは一乗と言い、或いは即ち是れ首楞厳なりと言い、或いは法性と言い、或いは法身と言い、或いは中道と言い、或いは畢竟空と言い、或いは正因仏性・性浄涅槃と言う。是の如き等の種種の異名、此れは皆な是れ実相の異称なり。故に『大智論』に云わく、「般若は是れ一法なるに、仏は種種の名を説く」[76]と。諸の衆生の類に随いて、之れが為めに異字を立つ。『大涅槃経』に云わく、「天帝釈に、千種の名有るが如し。解脱も亦た爾り。諸の名字多し」[77]と。又た云わく、「仏性と言うは、五種の名有り」[78]と。故に皆な是れ機に赴いて物を利し、為めに異名を立つるな

76　『大智論』に云わく、「般若は是れ一法なるに、仏は種種の名を説く」『大智度論』巻第十八、「般若是一法　仏説種種名　随諸衆生力　為之立異字」（T25, 190c3-4）を参照。

77　『大涅槃経』に云わく、「天帝釈に、千種の名有るが如し。解脱も亦た爾り。諸の名字多し」『南本涅槃経』巻第三十一、迦葉菩薩品、「云何一義説無量名。猶如帝釈。亦名帝釈、亦名 憍尸迦、亦名婆蹉婆、亦名富蘭陀羅、亦名摩 佉婆、亦名因陀羅、亦名千眼、亦名舎脂夫、亦名金剛、亦名宝頂、亦名宝幢。是名一義説無量名」（T12, 810b8-12）を参照。「解脱」については、巻第五、四相品に、解脱のさまざまな意義を示している箇所を参照（同前, 631c17-637a5）。

78　云わく、「仏性と言うは、五種の名有り」『南本涅槃経』巻第二十五、師子吼菩薩品、「首楞厳三昧者、有五種名。一者首楞厳三昧、二者般若波羅蜜、三者金剛三昧、四

り。而して法体は是れ一にして、未だ曾て異なり有らず。帝釈の千名、名は同じからずと雖も、終に是れ天主[559a]と目(な)づくるが如し。豈に異名を聞くこと有るが故に、而も実相の理に非ずと言わんや。人の帝釈を供養し憍尸迦[79]を毀(そし)り、憍尸迦を供養し帝釈を毀るが如し。此の如き供養は、未だ必ずしも福を得ず。末代の弘法者も亦た爾り。或いは黎耶・自性清浄心を信じて、畢竟空を毀る。或いは畢竟空・無所有と言い、黎耶識・自性清浄心を毀る。或いは『般若』に実相を明かし、『法花』に一乗を明かすは、皆な仏性に非ずと言う。此の求福は、豈に慮禍[80]の若からんや。若し名異体一を知らば、則ち随喜の善は、法界に遍し。何ぞ諍(あらそ)う所あらんや。

第五節　衆経の体と為す

第五に衆経の体と為すとは、諸の摩訶衍経は、皆な実相不思議の真性解脱を用て体と為すなり。

問うて曰う。諸経に或いは実相・真性の名無きこと有り。何ぞ備(つぶ)さに衆経の体と為すことを得んや。

答えて曰う。向(さき)に辨ずる所の如し。一法異名は、諸経は実相の名の説を作さずと雖も、若し中道・法界・如来蔵・正因仏性・本有・涅槃を説き、皆な是れ実相の異名なりと説かば、即ち衆経の為めに体と作るなり。

第六節　観心に約す

第六に観心に約すとは、若し小乗の行人ならば、持戒・坐禅し、背捨・勝処の一切の法門を発す。若し無常・無我・寂滅の印を得ずば、此の観の中に入りて、皆な邪倒を成ず。理を悟り無漏を成ずること能わざるなり。大乗の観法も亦復た是の如し。若し法性・実相の印を得ずば、多く魔業を成じ、二辺に堕す。豈に不二法門に入り、不思議解脱に住することを得んや。

者師子吼三昧、五者仏性。随其所作、処処得名」(同前, 769b6-9) を参照。

79　憍尸迦　Kauśikaの音写語。帝釈天の別名。前注77を参照。

80　慮禍　憂慮の過失が自身に及ぶこと。

問うて曰う。凡夫の初心は、豈に即ち修することを得んや。

答えて曰う。譬えば人の的を射るに、的に著意を作し、箭を放つに比[81]至るまで、已に丈･尺の疎[82]有り。発軫[83]に奢漫[84]なれば、何ぞ能く著することを得んや。正観を学ぶ心も亦復た是の如し。

第七節　此の『経』を通釈す

第七に此の『経』を通ずとは、此の『経』の品品は、皆な異名もて真性解脱を説く。其の道機の純熟するの者は、此れを聞いて道を得るなり。

第三章　仏国の因果を宗と為すを明かす

大段の第三に仏国の因果を宗と為すを明かすとは、宗は即ち是れ一教の綱維なり。王有る処に必ず輔臣[85]有りて共に治するが如し。経は既に体を立つれば、必ず須らく宗を明かして、以て教を成ずべきなり。今、此の義を明かすに、略して五重と為す。第一に宗・体の不同を分別す。第二に正しく因果を明かして、宗の義を辨ず。第三に因果を明かして、仏国の義を成ず。第四に観心に約す。第五に此の『経』の文を通ず。

第一節　宗・体の不同を分別す

559b
第一に宗・体の不同を分別すとは、即ち二意と為す。一に先に宗・体の異ならざるを覈す。二に正しく宗・体の不同を明かす。

第一項　先に宗・体の不異を覈す

一に先に宗・体の不異を覈すとは、有る師の云わく、此の『経』は、権実を

81　比　底本の「此」を、宋本によって「比」に改める。「比」は、到達するの意なので、「比至」は、到達する意となる。

82　丈・尺の疎　「疎」は、離れていること。一丈と一尺の相違を意味するようである。

83　発軫　物事の始めを意味する。

84　奢漫　「奢」は、緩慢の意。「漫」は、とりとめのないこと。

85　輔臣　天子を助ける家来の意。

宗と為す。宗は即ち是れ体なり。今問う。若し宗・体は是れ一ならば、体は是れ此の『経』の主なり。是れ則ち此の教に唯だ二法有り。不二の理無ければ、則ち諸法実相の印無し。若し諸法実相の印無くば、教は則ち主無し。何ぞ諸経に皆な此の『経』は衆経の王なりと云うことを得んや。復た次に若し権実の二法を以て体と為さば、亦た応に二法を以て印と為すべきなり。是の事は已に前に釈するが如し。譬えば国に但だ一主有ることを得て、応に両主を立つべからざるが如くなり。若し一経の教に二体有らば、亦た応に国に二君有るべきなり。

第二項　正しく宗・体の不同を明かす

二に正しく宗・体の異なりを明かすとは、経論を尋ぬるに、亦た宗・体を分別せざるの文、此れは弘法の法師の情[86]に出ず。但だ義を作すこと巧便ならば、経教を開発して、学者をして意を見せしめんと欲す。故に須らく爾るべきなり。非因非果の真性を体と為し、因果を宗と為す。因果に約して、以て非因非果を顕わす。因を挙ぐれば、則ち万行を摂す。果を挙ぐれば、則ち万徳を摂す。故に因果を以て宗と為す。綱を提（ひっさ）げて目動くが如し。又た、君主は是れ一にして、輔臣に二有るが如し。二臣は共に一主を輔（たす）けて、能く天下を治するが如し。今、非因非果は是れ一にして、因果は是れ多なり。一教を顕成し、有縁を利益す。宗・体の別を分かつに、仏国の因果を以て宗と為すなり。

第二節　正しく因果もて宗の義を辨ずるを明かす

第二に正しく因果を明かして、此の『経』の宗を辨ずとは、仏国の因果を以て宗に当（あ）つ。今、故（ことさら）に仏国を以て名を標す。此れに就いて即ち二意と為す。一に正しく因果を明かすを宗と為す。二に料簡す。

86　情　底本の『性』を、『籤録』の「性疑当作情。謂情志也」によって「情」に改める。

第一項　正しく因果を宗と為すを明かす

一に因果を明かすを宗と為すとは、但だ非因非果は既に通じて衆経の体と為せば、而も因にして而も果なるは、亦た通じて衆経の宗と為す。宗は則ち不定なり。或いは単に因を用て宗と為す。或いは単に果を用て宗と為す。或いは因果合して宗と為す。『涅槃』に涅槃の常住の四徳の果を明かすが如し。文の内に五行･十功徳の因果を明かさざるに非ず。果は正にして、因は傍なり。但だ果を以て宗に当つ。若是し『大品』ならば、般若の智照の因を明かす。文の中に種智・涅槃の果無きに非ず。因は正にして、果は傍なり。但だ因を以て宗と為す。若し『法華』ならば、一乗の因果を明かす。蓮華を借りて名と為す。是れ則ち因果は倶に宗と為す。此の『経』は人法に従って名を得。人は能く法を行ず。即ち是れ因地[559c]の行人なり。法は不思議解脱と名づく。解脱は是れ断徳の果なり。果に望んで因を行ずるが故に、仏国の因果を以て宗と為すなり。

第二項　料簡

二に料簡とは、問うて曰う。若し非因非果、而も因にして而も果なりと言わば、今の『涅槃』は何が故に但だ果のみにして因ならず、『大品』は但だ因のみにして果ならずや。此の『経』は既に是れ解脱の名なれば、何ぞ但だ果ならざるや。

答えて曰う。若し通じて論ぜは、亦た此の義を得。而して義に傍・正有り。『大涅槃』は、果は正にして因は傍なり。『大品』は、因は正にして果は傍なり。今の『経』は、双べて仏国の因果を挙ぐ。是の故に仏国の因果は、以て宗に当つるなり。所以は何ん。長者の子は蓋を献じて、「願わくは仏国土の清浄を得るを聞かんことを」と云うが如きは[87]、即ち果を問う。「唯だ願わくは世尊

87　長者の子は蓋を献じて、「願わくは仏国土の清浄を得るを聞かんことを」と云うが如きは　『維摩経』巻上、仏国品、「爾時長者子宝積説此偈已、白仏言、世尊、是五百長者子、皆已発阿耨多羅三藐三菩提心、願聞得仏国土清浄、唯願世尊説諸菩薩浄土之」（T14, 538a15-18）を参照。

よ、諸の菩薩の浄土の行を説かんことを」[88]は、即ち是れ因を問う。仏は答えて、「直心は是れ菩薩の浄土なり」と云う[89]は、即ち是れ因に答う。「諂(へつら)わざる衆生は其の国に来生す」[90]は、即ち是れ果に答う。命宗の始めに、双べて因果を問う。答えも亦た倶に因果に答う。且らく浄名は仏を輔け、因果の教を弘むるなり。室外に国王・長者に勧めて此の身を厭わしむるが如きは、即ち是れ因を弘む。「当に仏身を楽(ねが)うべし」[91]は、即ち是れ果を弘む。乃至、諸の弟子・菩薩等を弾ずるに、処処に因果を明かすの文有り。又た、室内に十方仏土は皆な空なりと明かすが如きは、即ち是れ果を明かす。有疾の菩薩、三観を用て心を調うる[92]は、即ち是れ因を明かす。不思議品は是れ果なり。観衆生品・仏道品・入不二法門品・香積品は是れ因なり。室を出。掌もて大衆を擎(ささ)げ菴羅園に向かうは、即ち因を迴(めぐ)らして果に向かうを表わす。如来は述成し、宗に復して義を明かし、具さに菩薩の行を辨ずるは、即ち是れ因を述ぶ。諸仏土にて音声もて仏事を為し、寂滅もて仏事を為す等を明かすは、即ち是れ果を述ぶ。験(あき)らかに知んぬ、一教の始終は、皆な因果を明かして、以て仏国を成ず。故に並びに用て宗に当つるなり。

第三節　因果もて仏国の義を成ずるを明かす

第三に正しく因果を明かし、仏国の義を成ずとは、此れに就いて即ち三意と為す。一に略して因果の相を辨ず。二に通別を簡ぶ。三に正しく仏国を成ず。

---

88 「唯だ願わくは世尊よ、諸の菩薩の浄土の行を説かんことを」 前注87を参照。

89 仏は答えて、「直心は是れ菩薩の浄土なり」と云う 『維摩経』巻上、仏国品、「直心是菩薩浄土、菩薩成仏時、不諂衆生来生其国」(同前, 538b1-2) を参照。

90 「諂わざる衆生は其の国に来生す」 前注89を参照。

91 「当に仏身を楽うべし」『維摩経』巻上、方便品、「此可患厭、当楽仏身」(同前, 539b29) を参照。

92 有疾の菩薩、三観を用て心を調うる 『維摩経』巻中、問疾品を指す。

第一項　略して因果の相を辨ず

一に略して因果の相を辨ずとは、因は是れ修行の法なり。行の本は理に約す。理は即ち非因非果にして、行は即ち因果なり。若し非因非果を離れて、因果を辨ぜば、是れ邪の因果なり。今、此の理に約して因果を明かすは、是れ正しき因果なり。『経』に云わく、「隠るるを如来蔵と名づけ、顕わるるを名づけて法身と為す」[93]と。菩薩は修行して、此の蔵理[94]を顕わすに、功用は未だ円かならざるが故に、名づけて因と為す。蔵理は円かに顕われ、究竟の解脱なるは、即ち是れ果なり。故に『大涅槃経』に云わく、「是れ因にして果に非ざるは、仏性の如し。是れ果にして因に非ざるは、大涅槃の如し。非因非果を、仏性と名づけ、非因非果を、大涅槃と名づくるなり」[95]と。

第二項　通別を簡ぶ

二に通別を簡ぶを明かすとは、此れに就いて即ち二意と為す。一に別して不思議の因果を簡ぶ。二に通じて因果を簡ぶ。

第一目　別して不思議の因果を簡ぶ

一に別して不思議の因果を簡ぶとは、問うて曰う。二は俱に非因非果なり。何が故に仏性は但だ因にして果に非ず、涅槃は但だ果にして因に非ざるや。

答えて曰う。此れは別教の別義を明かし、因果を分別するなり。若し円教の通義ならば、俱に得。仏性は是れ果なりとは、『大涅槃経』に、「仏性は、即

93　『経』に云わく、「隠るるを如来蔵と名づけ、顕わるるを名づけて法身と為す」『勝鬘経』法身章、「過於恒沙不離、不脱、不異、不思議仏法成就、説如来法身。世尊、如是如来法身不離煩悩蔵、名如来蔵」（T12, 221c9-11）を参照。

94　蔵理　如来蔵の理をいう。

95　『大涅槃経』に云わく、「是れ因にして果に非ざるは、仏性の如し。是れ果にして因に非ざるは、大涅槃の如し。非因非果を、仏性と名づけ、非因非果を、大涅槃と名づくるなり」『南本涅槃経』巻第二十五、師子吼菩薩品、「是因非果、如仏性。是果非因、如大涅槃。是因是果、如十二因縁所生之法。非因非果、名為仏性。非因果故、常恒無変」（同前, 768b21-24）を参照。

ち仏なり」と云うが如し[96]。一切衆生は、未だ成仏せざるが故に、云何んが衆生にして而も仏性有るや。涅槃は即ち是れ因なりとは、又た云わく、「大般涅槃は、本自と之れ有り。今に適(はじ)まるに非ざるなり」[97]と。又た云わく、「仏性は、亦た因、亦た因因、亦た果、亦た果果なり。無明は行に縁たり、行は識に縁たり。十二因縁は、亦た因、亦た因因、亦た果、亦た果果なり」[98]と。初住は二住に望めば是れ因なり。三住に望めば是れ因因なり。三住は二住に望めば是れ果なり。初住に望めば是れ果果なり。乃ち金剛に至りて、大涅槃に望めば因因と為す。大涅槃は金剛に望めば果果と為す。無上菩提は、但だ是れ因なるのみ。無上涅槃は、但だ是れ果なるのみ。故に今、不思議解脱の因果を明かすも、亦た是の如し。

第二目　通じて因果を簡ぶ

二に通じて因果を簡ぶとは、世間の因果は、即ち是れ苦・集の法にして、出世の因果は、即ち是れ道・滅なるを以てなり。一切の因果は、四諦を出でず。但だ大小もて義を明かすこと同じからず。故に二種の四諦の別有り。小乗には有作の四聖諦を明かし、大乗には無作の四聖諦を明かす。是の二の間に於いて、更に二種の四諦を立つ。無生の四真諦、無量の四諦を謂う。合して四種の四諦と為す。並びに是れ因果の義を明かす。具さに『涅槃』に出ず。解釈は、

96　『大涅槃経』に、「仏性は、即ち仏なり」と云うが如し　『南本涅槃経』巻第二十五、師子吼菩薩品、「若有人見十二縁者、即是見法。見法者、即是見仏。仏者、即是仏性。何以故。一切諸仏以此為性」(同前, 768c9-11) を参照。

97　云わく、「大般涅槃は、本自と之れ有り。今に適(はじ)まるに非ざるなり」『南本涅槃経』巻第十九、光明遍照高貴徳王菩薩品、「涅槃亦爾、本自有之、非適今也」(同前, 735b17) を参照。

98　云わく、「仏性は、亦た因、亦た因因、亦た果、亦た果果なり。無明は行に縁たり、行は識に縁たり。十二因縁は、亦た因、亦た因因、亦た果、亦た果果なり」『南本涅槃経』巻第二十五、師子吼菩薩品、「仏性者、有因、有因因, 有果、有果果。有因者、即十二因縁。因因者、即是智慧。有果者、即是阿耨多羅三藐三菩提。果果者、即是無上大般涅槃。善男子、譬如無明為因、諸行為果、行因識果。以是義故、彼無明体亦因、亦因因、識亦果、亦果果。仏性亦爾」(同前, 768b14-19) を参照。

『法華疏』に顕わるるなり[99]。

第三項　正しく仏国を成ず

三に因果もて仏国を成ずるを此の経の宗と為すを明かすとは、此の四種の因果に約して、以て仏国の因果を明かして、此の経の宗を辨ずるなり。若是し有作の集、無生の集ならば、此の二集の善悪、五濁の軽重は、根の利鈍に約して、同じく凡聖同居の浄・穢土を感じ、託生して報を受け、苦諦と為すなり。若是し生滅・無生の二種の道・滅ならば、同じく方便有余土を感じて託生す。即ち彼の土の苦諦なり。此の道・滅は、即ち是れ無作の苦・集、無量[560b]・無作の道・滅は分成す。即ち実報無障閡の浄土に生ずることを得。若し無作の智は満ぜば、則ち無作の集は尽く。則ち一生の報無く、智は心源に冥ず。此の『経』に云わく、「心は浄ければ、即ち仏土は浄きなり」[100]と。『仁王経』に云わく、「唯だ仏一人のみ浄土に居す」[101]と。故に知んぬ、四種の四諦の因果は、即ち是れ正報なり。正報を以ての故に、依報の国土を説くなり。

問うて曰う。有作・無生の集に、共に浄・不浄有り。無量・無作は云何ん。

答えて曰う。若し無量・無作の因果ならば、亦た浄・不浄有り。三乗の人は、三界の子・果の両(ふた)つの縛[102]を断じ尽くす。倶に法性身[103]を受け、変易土に

99　『法華疏』に顕わるるなり　『法華玄義』の迹門の十妙の第一境妙のなかに、「四種四諦」の説明がある（T33, 700c-702a）

100　此の『経』に云わく、「心は浄ければ、即ち仏土は浄きなり」　『維摩経』巻上、仏国品、「若菩薩欲得浄土、当浄其心。隨其心浄、則仏土浄」（T14, 538c4-5）を参照。

101　『仁王経』に云わく、「唯だ仏一人のみ浄土に居す」　『仁王般若経』巻上、菩薩教化品、「三賢十聖住果報　唯仏一人居浄土」（T8, 828a1）を参照。

102　子・果の両つの縛　子縛と果縛のこと。子縛は、煩悩が我を束縛すること。果縛は、煩悩の果報である生死の苦果が我を束縛すること。

103　法性身　『大智度論』では、菩薩を二種類に区別している。たとえば、巻第三十八には「菩薩有二種。一者随業生、二者得法性身」（T25, 340a2-3）とある。同巻、「菩薩有二種。一者生身菩薩、二者法身菩薩」（342a22-23）、巻第七十四には「是菩薩有二種。一者生死肉身、二者法性生身。得無生忍法、断諸煩悩。捨是身後、得法性生身」（580a14-16）などとあり、三界の外に身を受ける菩薩を法身の菩薩、法性生身の菩

生ずることを得。三蔵の二乗、通・別・円の菩薩の五人の功徳に、既に優劣・利鈍の不同有れば、亦た応に横に浄穢の別を論ずることを得べし。若し別教ならば、蓮華国の諸の菩薩は、生死の人に非ず。其の土も亦た得。竪に浄・不浄を論ず。諸地の菩薩は、未だ性浄の源を窮めず、猶お分惑有り。故に三賢・十聖は、果報に住す。唯だ仏一人のみ、浄土に居す。故に知んぬ、因果の語は、通じて凡従り聖に至るは、正意に非ず。但だ仏国の因果を論ずるを、此の『経』の正宗と為す。文に入りて更に当に略して分別すべきなり。

第四項　観心に約す

第四に観心に約すとは、下の文に云わく、「其の心の浄きに随いて、即ち仏国は浄し」[104] と。心性の本浄を観ずるは、猶お虚空の如し。即ち是れ性浄の境なり。境は即ち国なり。観智もて此の心を覚悟するを、之れを名づけて仏と為す。初観を因と名づけ、観成ずるを果と名づく。若し自行を論ぜば、即ち是れ心主に染無し。若し化他を論ぜば、即ち是れ心数の解脱なり。智慧数は大臣と為す。能く諸数の上の惑を排して、以て心源の清浄土に還るなり。故に云わく、「心は浄ければ、即ち仏土は浄きなり」と。

第五項　此の『経』の文を通ず

第五に此の『経』の文を通ずとは、仏は宝積の為めに仏国の因果を説くが如し。即ち是れ当宗の下の文に、自ら説かずと雖も、浄名は即ち是れ法王の大将なり。仏を助け因果の正教を闡揚し、仏の仏国の因果を説くを符成し、物の縁縛を断じ、仏国に生じて、菩薩の仏国土を浄むるの行を成ぜしむるなり。故に室外の品品に皆な因果の説有り、室内の品品に亦た因果の説有り、出室に亦た因果の説有りて、皆な仏国の教を符成するは、此の『経』の文に著わるるなり。

薩と呼ぶ。したがって、ここでいう「法性身」はこの菩薩が三界の外において、法性を体得して受ける身をいう。

104　下の文に云わく、「其の心の浄きに随いて、即ち仏国は浄し」　前注 100 を参照。

第四章　権実の善巧を用と為す

大段の第四に権実善巧を用と為すとは、不思議の体・宗は既に成ずれば、此の教に必ず功能有り。功能とは、権実に物[560c]を利するの功能有るなり。亦た五意と為す。第一に権実の用を簡ぶ。第二に諸教の権実の不同を明かす。第三に権実の義を釈す。第四に折伏・摂受なり。第五に観心に約す。

第一節　権実の用を簡ぶ

第一に権実の用を簡ぶとは、有る人は偏えに権巧を用うるに測ること莫きを用と為す。此の用は偏を明かすなり。今言う。権実は悉ごとく得るを用と為す。所以は何ん。若し無言の道を論ぜば、権実は並びに説く可き無し。因縁有るが故に、俱に説くことを得可し。若し権に益有りと説かば、権は即ち是れ用なり。実は物をして悟ることを得しむと説かば、実は即ち是れ用なり。是の故に俱に得るを、此の『経』の用と為すなり。

問うて曰う。若し本と是れ体にして、体従り用を起こさば、乃ち権は是れ用なりと言う可し。那んぞ実も亦た是れ用なることを得ん。若し皆な是れ用ならば、便ち体・用の殊なり無し。亦た宗・体の別無し。

答えて曰う。権実に多種有り。若し自行・化他に就いて権実を明かさば、前来の権実は、但だ是れ用にして体に非ず。今の『経』は正しく化他に就いて権実を明かす。是の故に権実は俱に是れ用なり。

第二節　諸教の権実の不同を明かす

第二に諸教の権実の不同を明かすとは、『華厳』に具さに二教有り。別教を権と為し、円教を実と為す。三蔵は一向に是れ権にして、化城[105]もて引接（いんしょう）するなり。方等は備さに四教有り。三権・一実なり。『般若』は三蔵を廃すれば、但だ三教有るのみ。二権・一実なり。『法華』は正直に方便を捨て、但だ一実のみ有り。『涅槃』は備さに四教を釈す。因に在りては三権・一実にして、果

105　化城　『法華経』化城喩品に説かれる化城宝処の譬喩に基づく表現。化城は声聞・縁覚の涅槃を意味し、宝処（宝所）は成仏をたとえる。

を辨ずるに、唯だ一実のみ有ること同じきなり。

問うて曰う。此れは方等と何の異なりあるや。

答えて曰う。方等は、二は実に入り、二は実に入らず。『涅槃』は四俱に実に入る。此れを大異と為す。今の『経』は是れ方等教の摂なり。因に三権有り、果は則ち一実なり。二は入り、二は実に入らざるなり。分別は具さに『法華玄義』に在り。

第三節　権実の義を釈す

第三に権実の義を釈するに、即ち三種有り。一には化他の権実なり。二には自行・化他の権実なり。三には自行の権実なり。

一に化他の権実を明かすとは、諸仏菩薩の見る所の三諦は凡人に向かいて説示す可からず。随他意語は、悉皆ごとく是れ権なり。今は権に約して実を明かすなり。此れは則ち千万種の二智有り。四悉檀は縁に赴くこと同じからず。衆家は善く此の二智の意を得ず。経論に明かす所の二智を取るに随いて之れを用うる者は、執諍す、云云なり。

二には自行・化他[561a]の権実とは、諸の仏・菩薩の随他意説の如きは、並びに是れ権智なり。随自意語は、皆な実智なり。

三に自行の権実とは、諸の仏・菩薩の自行の証する所の二諦・三諦の理は、以て権実を辨ずるなり。還(ま)た将に一家に三種の二諦を明かさんとす。之れに対すること冷然[106]たり。義推するに解す可し。

今の『経』に明かす所は、備さに三種の二智有り。国王・長者・諸の声聞は、化他の二智を用う。諸の菩薩の為めに、自行・化他の二智を用う。口を杜(ふさ)ぎ言無きは、是れ自行の二智なり。

第四節　折伏・摂受を明かす

第四に折伏・摂受とは、即ち二意と為す。一に略して折伏・摂受を明かす。

106　冷然　冷然に通じる。冷は聆に通じる。理解するさまをいう。

二に正しく此の『経』の文を通ず。

第一項　略して折伏・摂受を明かす

一に略して折伏・摂受を明かすとは、『勝鬘』に云うが如し、「応に折伏すべき者には、而も之れを折伏す。応に摂受すべき者には、而も之れを摂受す。折伏・摂受を以ての故に、正法をして久しく住することを得しめんが為めの故なり」[107]と。今、浄名は不思議の法をして久しく住することを得しめんが為めの故なり。是を以て方便の折伏、実智の摂受を以て類す。『戒序』に、「老死は近きに至り、仏法は滅せんと欲す」と云うが如きは[108]、仏法は湛然たり。何ぞ嘗(かつ)て滅有らん。若し魔は経巻を焼かば、尚お二十億の菩薩有りて、仏法を受持す。故に滅せずと知る。

今、滅と言うは、人寿の尽くるに約すが故に、其の滅を言う。凡夫は未だ無漏の慧命を得ざるが如し。未だ禁戒を秉持(へいじ)すること能わず。身は若し無常ならば、戒法は即ち謝す。故に仏法は滅せんと欲す。戒・定・慧・解脱・解脱知見の五分法身は、本と色身に依りて起こる。色身は既に死すれば、五分も亦た滅す。即ち是れ身内に仏法は滅するなり。若し能く勤進し真を発せば、道共戒[109]を得。此れは則ち「一たび受くれば、退かず、常に寂然たり」[110]と。即ち五分法身有りて具足す。仮令(たと)い人天を七反して、悪国に生ずと雖も、但だ

107　『勝鬘』に云うが如し、「応に折伏すべき者には、而も之れを折伏す。応に摂受すべき者には、而も之れを摂受す。折伏・摂受を以ての故に、正法をして久しく住することを得しめんが為めの故なり」『勝鬘経』十受章、「我得力時、於彼彼処見此衆生、応折伏者而折伏之。応摂受者而摂受之。何以故。以折伏・摂受故、令法久住」（T12, 217c11-13）を参照。

108　『戒序』に、「老死は近きに至り、仏法は滅せんと欲す」と云うが如きは　たとえば、『十誦比丘波羅提木叉戒本』、「大徳僧聴。冬時一月過少一夜、余有一夜三月在。老死至近、佛佛法欲滅。諸大徳、為得道故、一心勤精進」（T23, 470b27-29）を参照。

109　道共戒　無漏定に入って無漏心が生じている間だけ得られる戒。

110　「一たび受くれば、退かず、常に寂然たり」『維摩経』巻上、仏国品、「以斯妙法済群生　一受不退常寂然　度老病死大医王　当礼法海徳無辺」（T14, 537c21-22）を参照。

須陀洹果を失わざるのみに非ず、此の人は必ず阿羅漢果を得。是れ則ち陰身は滅すと雖も、仏法は滅せず。五分法身に、朽壊無きなり。即ち是れ仏法は久しく住す。

若し大乗を義と為さば、復た羅漢の尽・無生智を証し、乃至、辟支迦[111]は十種の観もて十二因縁を観じ[112]、能く習気を侵すと雖も、亦た灰滅[113]に帰す。百二十の人は付嘱に堪えず、財宝を喪失す[114]。若し能く仏知見を開かば、二十五三昧無方の用を得、仏法を住持し、重宝を守護す。重宝とは、即ち百斤の金、百句の解脱[115]の真宝なり。盛壮の年の二十五なる者は[116]、付嘱す可きに堪ゆるが如し。此の人は能く折伏・摂受し、法をして久しく住することを得しむるなり。

111　辟支迦　pratyekabuddha（辟支仏。縁覚）の pratyeka の音写語。

112　辟支迦は十種の観もて十二因縁を観じ　『菩薩瓔珞本業経』巻上、賢聖学観品、「仏子、六達有法縁故起智。所謂十十二因縁、十種照。一我見十二縁。二心為十二縁。三無明十二縁。四相縁由十二縁。五助成十二縁。六三業十二縁。七三世十二縁。八三苦十二縁。九性空十二縁。十縛生十二縁」（T24, 1015a22-26）を参照。

113　灰滅　灰断ともいう。灰身滅智と同義。無余涅槃に入って、身も心＝智もまったく無に帰すこと。

114　百二十の人は付嘱に堪えず、財宝を喪失す　『南本涅槃経』巻第三、長寿品、「譬如老人年百二十、身嬰長病、寝臥床席、不能起居、気力虚劣、余命無幾。有一富人縁事欲行、当至他方。以百斤金寄彼老人而作是言、我今他行、以是宝物持用相寄。或経十年、或二十年，事畢当還、還時帰我。是老病人即便受之、而此老人復無継嗣、其後不久病篤命終、所寄之物悉皆散失。財主行還、求索無所。如是癡人不知籌量所寄可否、是故行還求索無所、以是因縁喪失財宝。世尊、我等声聞亦復如是、雖聞如来慇懃教戒、不能受持令得久住、如彼老人受他寄付」（T12, 618c27-619a9）を参照。

115　百句の解脱　『南本涅槃経』巻第五に、解脱についてさまざまな解説があり（同前，631c27-637a5）、それを指したものと推定される。

116　盛壮の年の二十五なる者は　『南本涅槃経』巻第三、長寿品、「譬如有人年二十五、盛壮端正、多有財宝・金・銀・琉璃、父母・妻子・眷属・宗親悉皆具存。時有人来寄其宝物、語其人言、我有縁事欲至他処、事訖当還、還時帰我。是時壮夫守護是物如自己有。其人遇病、即命家属。如是金宝是他所寄、彼若来索悉皆還之。智者如是善知籌量、行還索物皆悉得之、無所亡失」（同前，619a13-20）を参照。

第二項　正しく此の『経』の文を通ず

二に正しく此の『経』を通ずるを明かすとは、今、浄名は釈迦の正法をして久しく住せしめんと欲す。是の故に室外に弾呵し、室内に摂受す。通じて弾呵・摂受を論ずれば、処処に皆な得。人の訶罵は是れ暫時にして、長養は是れ本心なるが如し。而るに今、或る時は、権智を用て訶し、実智を以て摂す。国王・長者を弾ずるが如きは、即ち是れ権訶なり。「当に仏身を楽うべし」[117]とは、是れ実摂なり。須菩提を訶して云うが如し、「食に於いて等しき者は、法に於いても亦た等し」[118]と。「八邪に入りて、八正を得」[119]と。是れ実智を用て訶し、還た権を用て摂す。「仏は幻人を説くが如し。是の事を以て訶するに、寧(いずく)んぞ懼(おそ)れ有らんや」と云う[120]。此れは即ち権もて摂す。阿難を訶するも亦た爾り。弥勒等を訶するが如きは、実智もて訶し、実智もて摂受す。迦旃延を訶するが如きは、権もて弾じ、権もて受く。室内は別の義なり、云云。故に知んぬ、浄名は折伏・摂受して、此の教を成ずるなり。

第五節　観心に約す

第五に観心に約して権実を明かすとは、中道を観ずる時、二観を以て方便と為し、中道に入ることを得。是れ権の折伏、実智の摂受なり。若し中道を観じて二乗の観を発せば、即ち是れ実智の折伏、権智の摂受なり。若し二諦を観じ、還た二観を発せば、即ち是れ権の折伏、権の摂受なり。若し中道を観じて、還た中道を発せば、即ち是れ実智の折伏、実智の摂受なり。復た次に善く

---

117 「当に仏身を楽うべし」 前注91を参照。

118 須菩提を訶して云うが如し、「食に於いて等しき者は、法に於いても亦た等し」『維摩経』巻上、弟子品、「唯、須菩提、若能於食等者、諸法亦等。諸法等者、於食亦等」（T14, 540b21-22）を参照。

119 「八邪に入りて、八正を得」『維摩経』巻上、弟子品、「若能不捨八邪、入八解脱、以邪相入正法」（同前, 540b6-7）を参照。

120 「仏は幻人を説くが如し。是の事を以て訶するに、寧(いずく)んぞ懼(おそ)れ有らんや」と云う『維摩経』巻上、弟子品、「維摩詰言、唯、須菩提、取鉢勿懼。於意云何。如来所作化人、若以是事詰、寧有懼不」（同前, 540c13-15）を参照。

四随の用心を将(もち)う。『大止観』の三十六転の解説の如し[121]。即ち是れ観心の折伏・摂受にして、正法は住することを得るなり。

第五章　教相

大段の第五に教相を明かすとは、前の大段の四重に此の『経』の一部を釈するに、正意は略(ほ)ぼ顕わる。但だ此の『経』は衆経と同有り異有り。事は須らく分別すべし。而るに、前に四教を明かし、処処に教相を簡別し、衆経の同異を辨ず。大意は略ぼ応に見る可し。但だ恐らくは散じて教相の同異を明かすに、尋ぬる者は或いは未だ明了ならず。今、須らく更に此の『経』の同異の相を釈すべし。此れに就いて即ち四意と為す。第一に教相の大意を明かす。第二に略して諸師の判教の不同を出だす。第三に研詳去取す。第四に正しく判経の教相を明かす。

第一節　教相の大意を明かす

第一に教相の大意を明かすとは、諸経は同じく体・宗・用を明かす。縁に赴いて物を利して同異有るは、但だ稟教の徒の根縁は不一なるを以てなり。時・方[122]に別有り。是を以て大聖は教を設くるに、名字は同じからず。言・方[123]も亦た別(561c)なり。故に頓漸もて機に赴くこと有り。『華厳』の如きに至りては、広く菩薩の行位を明かす。三蔵は偏えに小乗を説く。方等は小を破りて大を顕わす。『大品』は法に歴て遣蕩[124]し宗に会す。『法花』は始終を結撮[125]し、開権顕実す。『涅槃』は衆経を解釈し、同じく仏性常住に帰す。今、此の『経』

121　『大止観』の三十六転の解説の如し　『摩訶止観』巻第五上に、十乗観法の第三、善巧安心が説かれるなかで、信行と法行について三十六種の機根の転換を説いていることを指す。

122　時・方　時間と場所（方所）の意。

123　言・方　言葉と方法の意。

124　遣蕩　「遣」は、取り除くこと。「蕩」は、洗い流すこと。『般若経』における実体否定＝空の思想を指す。

125　結撮　統括する、総括するの意。

は抑揚褒貶して機に赴き、不思議解脱を説くとは、猶お是れ方等の教なり。

第二節　略して諸師の判教の不同を明かす

第二に略して諸師の判教の不同を出だすとは、観・岌[126]法師の若きは、三時もて義を明かす。一に有相法輪、二に無相法輪、三に常住法輪なり。此の『経』は並びに第二時の無相得道に属す。未だ仏性常住、涅槃を明かさず。

開善・光宅[127]の若きは、判教に三種有り。一に頓、二に漸、三に偏方不定なり。漸教は分かちて五時と為す。此の『経』は、是れ第三時の声聞を折挫し、菩薩を褒揚するの教なり。猶お未だ会三帰一して、仏性常住を辨ぜず。若是し荘厳は四時もて義を明かさば[128]、此の『経』は猶お『般若』の無相得道に属す。亦た未だ会三帰一、仏性常住を明かさず。若是し地論は四宗[129]もて義を明かさば、此の『経』は即ち是れ真宗[130]、大乗の縁起反出の教[131]なり。若是し流支は

126　観・岌法師　「観」は、道場寺慧観を指す。「岌」は、『法華玄義』巻第十上に出る「虎丘山岌師」（T33, 801a24-25）を指す。虎丘山は蘇州にある山の名であるが、岌師については未詳。

127　開善・光宅　開善寺智蔵（458-522）と光宅寺法雲（467-529）を指す。『法華玄義』巻第十上、「三者定林柔・次二師、及道場観法師、明頓与不定同前、更判漸為五時教。即開善・光宅所用也。四時不異前、更約無相之後・同帰之前、指浄名・思益諸方等経、為褒貶抑揚教」（同前, 801b3-8）を参照。

128　荘厳は四時もて義を明かさば　「荘厳」は、荘厳寺僧旻（467-527）を指す。『法華玄義』巻第十上、「二者宗愛法師、頓与不定同前、就漸更判四時教。即荘厳旻師所用」（同前, 801a29-b1）を参照。

129　四宗　光統律師慧光（468-537）の四宗判を指す。『法華玄義』巻第十上には、因縁宗（『阿毘曇』）、仮名宗（『成実論』）、誑相宗（『大品般若経』・三論）、常宗（『涅槃経』・『華厳経』）を四宗判として紹介している。『法華玄義』巻第十上、「六者仏馱三蔵学士光統所辨四宗判教。一因縁宗、指毘曇六因四縁。二仮名宗、指成論三仮。三誑相宗、指大品・三論。四常宗、指涅槃・華厳等常住仏性本有湛然也」（同前, 801b11-15）を参照。

130　真宗　『法華玄義』巻第十上によれば、四宗に真宗と円宗を加えて六宗とする教判が紹介されている。「四宗有所不收、更開六宗。指法華万善同帰、諸仏法久後要当説真実、名為真宗。大集染浄俱融、法界円普、名為円宗」（同前, 801b18-20）を参照。

131　縁起反出の教　『籤録』には、「菩薩不思議神変の事を謂う」と注釈している。

半満もて義を明かさば[132]、此の経は即ち是れ満字の説なり。『華厳』・『涅槃』に異ならず。従来の名義、古今の判教は同じからず。『法華玄義』に、別して当に委(くわ)しく出だすべきなり。

第三節　研詳去取

第三に研詳去取とは、若し此の『経』は是れ第二時教、或いは第三時説にして、未だ仏性常住を明かさずと言わば、此の『経』は不思議真性を明かす。真性は豈に仏性に非ざらん。若し常住を明かさずと言わば、此の『経』に云わく、「如来の身は、即ち是れ金剛の体なり。衆悪は永く尽きて、衆善は普く会す。当に何ぞ疾有るべき」[133]と。豈に常住に非ざらんや。

次に若し此の『経』は是れ真宗の教にして『法華』を過ぐと言わば、何が故に諸の声聞人は、此の『経』の中に於いて、仏性を見ざること『法華』・『涅槃』に同じからんや。

次に若し此の『経』は即ち是れ満字にして、仏性常住を明かすと言わば、何が故に『涅槃』は判じて生蘇の教と為す。生蘇は既に得ざれば、即ち是れ醍醐なり。此の『経』は何ぞ即ち『涅槃』の満字と斉(ひと)しきことを得んや。諸の経論を引いて、衆義を検覈(けんかく)するは、備さに『法華玄義』に出ずるなり。

第四節　正しく経の教相を判ずるを明かす

第四に正しく此の『経』の教相を判ずるを明かすとは、但だ如来の経教は、乃ち三千[134]に遍満す。元と其の正意は、四種を出でず。一には頓教、二には漸教、三には不定教、562a四には秘密教なり。

一に頓教とは、即ち『華厳経』なり。譬えば日の出でて、前に高山を照らす

132　流支は半満もて義を明かさば　『法華玄義』巻第十上、「五者菩提流支明半満教、十二年前皆是半字教、十二年後皆是満字教」(同前, 801b10-11) を参照。

133　此の『経』に云わく、「如来の身は、即ち是れ金剛の体なり。衆悪は永く尽きて、衆善は普く会す。当に何ぞ疾有るべき」『維摩経』巻上、弟子品、「如来身者、金剛之体、諸悪已断、衆善普会、当有何疾」(T14, 542a7-8) を参照。

134　三千　三千大千世界を指す。

が如し[135]。又た、『涅槃経』に、「雪山に草有り、名づけて忍辱と曰う。牛は若し食せば、即ち醍醐を得」と云うが如きは[136]、即ち其の義なり。然るに、頓教と云うと雖も、菩薩を化せんが為めに、兼ねて別教の方便を開くこと無きに不ず。故に『無量義経』に云わく、「摩訶般若・華厳海空は、菩薩の歴劫修行を宣説す」[137]と。而るに、未だ曾て是の如き甚深なる『無量義経』を宣説せず。未だ『法華』に三乗は同じく仏知見を開き、本を発し迹を顕わし、成道して已来、甚だ大いに久遠なる[138]を得るに同じからず。此の如きは即ち諸の法師と同じからざるなり。

二に漸教とは、即ち是れ五味相生す。三蔵の初門の説く所の事の戒定は、即ち是れ牛従り乳を出だす。三蔵教に生滅の四諦を明かすは、即ち是れ乳従り酪を出だす。方等大乗は最初に無生の四諦を説く。無量・無作もて小乗を対破し、声聞の小法を楽う者を訶責するは、即ち是れ酪従り生蘇を出だす。『摩訶般若』も亦た無生の四諦を説く。而るに、具さに無量の四諦を明か

135　譬えば日の出でて、前に高山を照らすが如し　『六十巻華厳経』巻第三十四、宝王如来性起品に出る三照の譬喩、「譬如日出、先照一切諸大山王、次照一切大山、次照金剛宝山、然後普照一切大地」（T9, 616b14-16）を参照。天台家では、『華厳経』の本文の趣意を離れて、太陽が高山、幽谷、平地を順に照らすことを読み取り、釈尊の説法の順序を決める根拠としている。

136　『涅槃経』に、「雪山に草有り、名づけて忍辱と曰う。牛は若し食せば、即ち醍醐を得」と云うが如きは　『南本涅槃経』巻第三十二、迦葉菩薩品、「善男子、一切無明煩悩等結悉是仏性。何以故。仏性因故。従無明行及諸煩悩得善五陰、是名仏性。従善五陰乃至獲得阿耨多羅三藐三菩提。是故、我於経中先説衆生仏性如雑血乳、血者即是無明行等一切煩悩、乳者即是善五陰也。是故、我説従諸煩悩及善五陰得阿耨多羅三藐三菩提。如衆生身皆従精血而得成就、仏性亦爾。須陀洹人、斯陀含人断少煩悩、仏性如乳。阿那含人、仏性如酪。阿羅漢人、猶如生酥。従辟支仏至十住菩薩、猶如熟酥。如来仏性猶如醍醐」（T12, 818b27-c9）を参照。

137　『無量義経』に云わく、「摩訶般若・華厳海空は、菩薩の歴劫修行を宣説す」『無量義経』説法品、「次説方等十二部経、摩訶般若、華厳海雲、演（「雲演」は宋・元・明の三本、宮本には「空宣」に作る）説菩薩歴劫修行、而百千比丘、万億人天無量得須陀洹・得斯陀含・得阿那含・得阿羅漢、住辟支仏因縁法中」（T9, 386b24-28）を参照。

138　成道して已来、甚だ大いに久遠なる　『法華経』如来寿量品、「如是、我成仏已来、甚大久遠、寿命無量阿僧祇劫、常住不滅」（同前, 42c19-21）を参照。

し、歴劫修行を宣説す。亦た無作の四諦を説き、小乗の法を会すれば、皆な是れ摩訶衍にして、声聞をして転教[139]せしむ。即ち是れ生蘇従り熟蘇を出だす。『法華』の如きは、一実・無作の四諦を説き、諸の声聞の為めに、仏知見を開き、悉ごとく記莂を受け、大果実を成ずること、秋収冬蔵して、更に作す所無きが如し[140]。即ち是れ熟蘇従り醍醐を出だすが如し。又た、『涅槃経』は、諸の比丘の為めに、三修[141]・仏性・一実・無作の四諦を説き、諸の声聞の為めに、慧眼を開決し、仏性を見て、諸子を秘密の蔵に安置す。亦た是れ熟蘇従り醍醐を出だす。故に『無量義経』に、『大品』を説くは『法華』の前に在りと明かす。『大智論』に云わく、「『摩訶般若』は、『法華』の後に在り」[142]と。此の如く五味の義は常塗と一往似同するを明かす。細心に比並するに、次[143]を辨じ義を解するは、相い関せざるなり。

三に不定教を明かすとは、亦た旧解の別に遍方不定の説有るに同じからず。今、但だ五味の教の内に於いて、利根の人は、教教悉皆ごとく仏性を見ることを得るに同じからず。故に満字の義有り。故に『涅槃経』に云わく、「譬えば有る人は毒を乳、乃至、醍醐に置くに、亦た能く人を殺すが如し」[144]と。所

139　転教　『大品般若経』において、釈尊が須菩提に命令して、菩薩のために仏の教え＝般若波羅蜜を、方向を転じて（須菩提という声聞が声聞にではなく、菩薩に対して）教えること。

140　大果実を成ずること、秋収冬蔵して、更に作す所無きが如し　『南本涅槃経』巻第九、菩薩品、「如法花中八千声聞、得受記莂成大果実。如秋収冬蔵更無所作」（T12, 661b7-9）を参照。「秋収冬蔵」は、秋に収穫し、冬に収穫物を貯蔵すること。

141　三修　劣の三修と勝の三修があるが、ここは後者の意。劣の三修は、無常、苦、無我を修すること。勝の三修は、常、楽、我を修すこと。

142　『大智論』に云わく、「『摩訶般若』は、『法華』の後に在り」『大智度論』巻第九十三、畢定品、「如法華経中説畢定、余経説有退つ、有不退。是故今問為畢定、為不畢定。如是等種種因縁故、問定・不定」（T25, 713b29-c2）を参照。『般若経』を『法華経』以前に説かれる『般若経』と『法華経』の後に説かれる『般若経』に分けるのである。

143　次　次第順序の意。

144　『涅槃経』に云わく、「譬えば有る人は毒を乳、乃至、醍醐に置くに、亦た能く人を殺すが如し」『南本涅槃経』巻第二十七、師子吼菩薩品、「譬如有人置毒乳中、乃至

以に梁武・流支・摂山の三家は、此の経、『大品』は皆な是れ満字にして、仏性を明かし常を辨ずるは、意は此に在るなり。

四に秘密教[562b]とは、『大智論』に云わく、「仏は初めて成道するに、鹿苑にて四諦の法輪を転ず」[145]と。顕露教の中に、五人は諦を見て、須陀洹果を得、八万の人は法眼浄を得るを明かす[146]。秘密教は、無量の菩薩、大乗を説くを聞いて、無生忍を得[147]。復た次に始めて得道従り泥洹の夜に至るまで、常に般若を説く[148]。或いは即ち其の義なる可きなり。此の『経』に云わく、「仏は一音を以て法を演説するに、衆生は類に随いて各おの解を得」[149]と。此れも亦た是れ秘密教の相なり。若し時衆は皆な聞見することを得ずば、即ち是れ秘密教なり。

問うて曰う。若し爾らば、偏[150]方不定の説無かる可きや。

醍醐皆悉有毒。乳不名酪、酪不名乳、乃至醍醐亦復如是。名字雖変、毒性不失、遍五味中皆悉如是。若服醍醐亦能殺人、実不置毒於醍醐中。衆生仏性亦復如是、雖処五道受別異身、而是仏性常一無変」（T12, 784c9-14）を参照。

145　『大智論』に云わく、「仏は初めて成道するに、鹿苑にて四諦の法輪を転ず」『大智度論』巻第十、「若不爾、初転法輪説四諦則足、不須余法」（T25, 198a16-17）を参照。

146　顕露教の中に、五人は諦を見て、須陀洹果を得、八万の人は法眼浄を得るを明かす　『大智度論』巻第二、「仏在波羅奈　仏為五比丘　初開甘露門　説四真諦法　苦集滅道諦　阿若憍陳如　最初得見道　八万諸天衆　皆亦入道迹」（同前, 69b13-17）、同巻第三十四、「如釈迦文仏、転法輪時、憍陳如一人得初道、八万諸天諸法中得法眼浄」（同前, 311b1-3）を参照。

147　秘密教は、無量の菩薩、大乗を説くを聞いて、無生忍を得　『大智度論』巻第四、「仏法有二種。一秘密、二現示。現示中、仏・辟支仏・阿羅漢皆是福田、以其煩悩尽無余故。秘密中、説諸菩薩得無生法忍、煩悩已断、具六神通、利益衆生」（同前, 84c19-85a3）を参照。

148　始めて得道従り泥洹の夜に至るまで、常に般若を説く　『法華玄義』巻第十上には、「又大論云、従得道夜至泥洹夜、常説般若」（T33, 801c12-13）とあるが、出典未詳。やや内容が異なるが、『大智度論』巻第一、「又仏二夜経中説。仏初得道夜、至般涅槃夜、是二夜中間所説経教、一切皆実不顛倒」（T25, 59c5-7）を参照。

149　此の『経』に云わく、「仏は一音を以て法を演説するに、衆生は類に随いて各おの解を得」『維摩経』巻上、仏国品、「仏以一音演説法　衆生随類各得解　皆謂世尊同其語　斯則神力不共法」（T14, 538a2-4）を参照。

150　偏　底本の「遍」を、宋本によって「偏」に改める。

答えて曰う。五味の次第すら尚お不定を論ずることを得。偏[151]方に設(たと)い異説有るも、此れは復た何ぞ論ずるを須(もち)いんや。婆羅門は偈を将て此に来たりて。四種の論を出だす。所謂る牛王論・蝦蟇跳論・師子論・鳥眼論[152]なり。今、借りに便ち此の四種の論を用て、前の四種の教に通ず。牛王論は頓教に通じ、蝦蟇跳論は漸教に通じ、師子論は不定教に通じ、鳥眼論は秘密教に通ず。

今、此の『経』を判ずるに、是れ頓教に非ず、乃至、五味漸教の生蘇の味なり。若し不定教に約さば、即ち是れ毒を生蘇に於いて人を殺すなり。利根の菩薩は、此の教に於いて、不二法門に入り、仏性を見て、不可思議の解脱・涅槃に住す。即ち満字の教なり。若し秘密ならば、即ち知る可からざるなり。此の『経』の意は、主には教相を明かさず。是の故に委曲なるを須いざるなり。但だ教相の義は、多く関する所有り。最も解し難く明らめ難しと為す。『法華玄』に四教を辨ずること、義は方に得可し。略して大意を見るのみ。

仏法は不思議にして、唯だ教相のみ解し難し。
二乗、及び菩薩すら、尚お測ること能わざる所なり。
何に況んや諸の凡夫をや。而るに此の事を判ぜんと欲するは、
譬えば生盲の人、日輪の相を分別するが如し。
虚空界の一切の諸の色法を判じて、
了達すと言わんと欲せば、畢竟するに是の事無し。
是の故に法を説く者は、各おの慚愧の心を生じ、
自ら無明の闇を責め、戯論諍競を捨てよ。

維摩経玄疏巻第六

151　偏　底本の「遍」を、宋本によって「偏」に改める。
152　牛王論・蝦蟇跳論・師子論・鳥眼論　他に用例が見られず、意味不明。「蝦蟇」はガマガエルのこと。